なには潟

不如帰

259
1033

095342−000−7

特11−386

不如帰（なには潟）

堀内　秋葉／著

M43

DBQ−2997

如歸

堀内秋葉著

明治
43. 3. 17
内交

特川
386

なには潟 不如歸

堀内秋葉著

不如歸

一

（一）中之島公園、偶然の邂逅

梅田を發て大道路を一直線に、濛々と沙塵を起て、疾風の如く南に走る、新い電車は、渡邊橋の南詰、大阪瓦斯會社の前の所で、二分間ばかり停車をした。

誰が開たともなく、電車の扉がサッと開て、車室からサモ押出されたやふに五六人の男女打交つてどや〳〵と降た。そしてこの降た人等は　郵便本局の角を東に少し曲つた、北口の前に言ひ合せたやふに直立した。その間に北から又一輛、同じやふな電車が來て、今度は橋の南詰で、十字街を東に曲つた。

北口の前に直立した六人の男女は、此の時二三歩前に出て、彼の電車に停留を命じた。軈て車掌は六人を乘せて、大江橋迄運び去つた。

線路は少し上りではあるが、絲を引た如く直線であるのと、往來の人が尠いのとで、電車は渾轉速に出來る、三分間を出ずして早や大江橋に到着した。

乘客は降りて、日銀支店の角を曲つて、南に去つたものもあれば、大江橋を北へ越て、堂島の川岸を東に行く人もある。その中には六人の男女も、同じやうに電車から降て、此所で六人は別れてしまつた、その一番後から往く年頃二十一二の美人は、突と大江橋筋を横斷て、中の島公園の中に這入た、そして彼れは築山の前の、新しい椅子に腰を掛けた。

折柄此方の植林に、高く伸た梧桐の梢の、黄ばみし葉先から、法師蟬があはたゞしく鳴いて、赫々とした淡い夕陽が、根元の芙蓉の花に落て、世間は淋い秋思天地に入る。時しも彼方の亭の前に、多くの人が集つて、囁く聲喧しく、而かも婦人

の泣聲がする。

新しい椅子の美人はこの聲に思はず耳を欹てた、それは泣聲が哀れと云ふばかりではない、何となく痛切の裡に、如何にも腸を裁斷れるやふな、一種の悲みを含んで居る。彼の女は此の聲を聞度に、我が身の上に降かゝるものゝ如ふ、次第に眉をひそめるのである。

公園を挾む堂島川と土佐堀川から、時々吹上ぐる無心の秋風は、四邊を拂ふて冷やかに、人の不意を襲ふやふに地上の砂までを煽り立てた、此の時向ふ亭の中から五十格向の老婦人、吹き上ぐ沙塵を背にして、チヨコ〳〵と小走りに、四五間ばかり西に來て、彼の女が居る隣の椅子に、ゆくりなく腰を風た、それと同時に老婦人は、不圖彼方の美人の姿に眼を着て。

「貴女!!。」

と恁麼突然に、少しく癲走つた調子ではあるが、老婦人には珍い冴切つた聲で、

暫時彼の女の樣子を見つゝ、更らに又思切つたかのやふ。

「貴女や!!!、貴女は五百井樣のお孃さんでは仰在なくて?。」

「諾い……併し老女は?。」

と返辭は仕たが直ぐ口を噤んで、彼女は眤と老女を見詰た。

「私突然にお聲を懸て、寔に失禮でしたけれど、何麼やら貴女が五百井樣の、姉孃樣だと思ひまして、お聲をお懸申した譯なのですが、私は貴女に乳を上た昔の乳母の露で御座ます。」

「ねッ!! 老女が?。」

とは云つたが彼の女の胸中、容易に信ずる樣子も見へぬ、反て彼の女は老婦人の突飛な調方に驚いたほどで、何等の口も切らなく見ねた、其の素振を眼瞬く眺めた老婦人は。

「お孃さん、御不審は御尤です、失禮ですが貴女のお名は、五百井絹子樣と申上ま

せう……。」

言終つて老婦人は、得も云へぬ微笑を漂ねて、尙はも彼の女の樣子を窺ふ。

「まあ、能く御存じで被入ますがね、ですが老女が妾の、幼時の乳母の露だと被仰ますが、それなら何故に是れ迄に、妾の宅へは御出だなくて?。」

「それには色〳〵の譯が有つて、お出入をさせて戴けなくなつたのです。」

老女は恁麼云ひ切つた儘、口を噤んで語を亞ぬ。けども感慨胸に溢れたのか、老眼に宿す露一二滴。

事は甚だ意外に出て、而かも場所が場所なので、老女の言葉有の儘に、信ずる譯に行きかぬるまでも、自分が幼昔の乳母だ、と云はれて見ると何となく、彼の女も懷い氣持がして無氣に別れる心にもなれぬ。モウ少し慥かの事實を聞き取つた上で、甚麼にでも始末は付くと、彼の女が突嗟の決心であつた。

「では老女は、妾のお母樣を能く御存じでせふ。」

「それはモウ能く存じて居る段ぢやございません、私はその頃嬢様の、お母様には一方ならぬ、御恩を戴きましたもので、殊に御亡れ遊ばす前など云ふものは、私をお傍に召されて、些細のことまでお露、お露と、私でなければ何の御用を勤ても御意には召さぬ程でした、ですから私もその積りで、貴女のお守を致しながら、奥様のお傍を離れないやふに、お勤申たもので御座ますよ。」

「それが妾の何歳の頃であつたのです。妾はそれを覺なくつてよ。」

「嬢様のお見覺がないのは御最ですわ、まだ私のこの乳房を、嬉しさふにお咥遊ばして、何の頑是もお辨へ遊ばさない、數歳が四つと云ふ、極く無邪氣頃で有ましたもの。」

と云ひつゝ老女は懐をさぐり、疲ぶれた乳房を出して、その當年を思ひ出したかのやふ、遠慮もなく彼の女へ見せた、彼の女はそれを一寸見て。

「まあー、妾が其樣でしたの？。」

「ホ、、、、左うでございますよ、それは只今はお見違い申すほどに御立派に、御生長遊ばして、乳母やはこれ程嬉いことは世にありませんわ。」

「ですが妾……ホ、、、。」

彼の女は何事か云はんとして、躊躇すること二三度にして、その後を又一寸、一時の笑に紛らしたが、稍暫立つてから。

「妾!!、今迄態と名を云はなかつたけど、前刻から老女がお訊の、五百井絹子に相違ないのよ、家は中の島の四丁目ですよ。」

「ササ、左うで御座いませうとも、お匿し遊ばすのは御最もです、恁麼所で突然に、私が伺つたものですから御無理とは思ひませぬが、ですけれど私は、今に片時も忘れませぬのは、御宵て申したばかりでなくつて、他に色〳〵の事情もあり、先第一には貴女の御身の上やら小嬢様の事で　其の次には只今の、お母様と貴嬢の折合が、甚麼ことであらふかと、明け暮れ忘れたことは御座いませんよ。」

云ふ聲は潤み勝で、老女のお露は袂から、薄汚れた半巾を出して、ッッと両眼の涙を拭つた。これを眺めた五百井絹子も、同情に堪へぬ眼差して、突と其所に起つたかと思ふと、隣の椅子に歩み寄づて、お露の手を聢と握つた。

「乳母や!!!勘忍してお呉れ、如何に幼時代のことゝ云つたつて、妾のためには第二の母も同様な、乳母やの顔も知らないで……それが現在今此所に、その乳母やから聲かけられて、反つて今迄疑ぐつて、色〳〵の事まで聞き糺し、本統に済ないことをしてよ併し乳母やの今の居る宅は、何の邊に住んで居るのか、それを一寸云つて頂戴……。」

絹子は始て乳母なるものに、偶然の邂逅と偶然の物語をして、慈母も及ばぬ暖い言葉を耳にしては　宛然他人とも思へないと見ゐて、始て逢ふた老女の露を、忽ち「乳母や」と親しく言つた。

「嬢様、済むの済ないつてな事がありますものか、貴嬢の御心の裡にそれと御承知さへ下さいましたら、私はこれ程喜はありませんわ。」

両人は感極まつて手を握合ふた儘、秋の日の空に時雨來るそれの如く暫時は泣いて言葉は途切れた。折柄、此方の植込の所に、洋服姿の青年が二人、小松の蔭に佇んで居て、以前の人込みをして居つた邊で、如何にも哀れで而かも悲しく、ふるい聲して。

「何誰か何卒……。」

と公園の天地〻響く裂帛の聲がする。絹子に直ぐその聲の起りし方を眺め見た、それと同時に乳母と云はれた、お露も彼方を屹度と見詰た。けれどもその場所には、多くの人の立ち並ぶ姿のみ見へて、其の人であらふかと思ふ姿は、影だに認ることは出來ない、唯騒がしいばかりである。この裂帛のやうな悲しい聲に、絹子は尠からず憂哀の感に打れた。

「乳母や、今の哀れな聲がしたのは、向ふの人の居る所でせふか。」

と漸やく我れに還つたやふに、朧ながら問を發す、お露は少し眉をひそめて。

「さあー、甚麽でございませふ、ですがそれらしい姿は一向見へませぬよ。」

「デモ大變哀れな聲であつたわ。」

「眞實に然うでしたことねね。」

「それにしてに、巡査さんも來て居ないらしいわ、犬か何かの聲を聞き違ねたのかも知れんわ。」

「ですがお孃樣、今の聲は慥に人間の泣聲ですよ、而かも婦人の聲ですわ……。」

「矢張り左うかも知れないわねね、併し乳母や、其許の住所を聞かせてお呉れ。今東區高津の裏門に住んで居ますのですよ、番地は百八番で、石階を降りたッイ角の家ですわ」

「閑で好い所だこと。」と絹子が僅かに恁麽言つた時には、公園は電燈の光りを浴

びて、両人の外に人影はなかつた。

「宅はそれとして表の標札は……別に恁麽と云ふ程のことは無いが、若しも書簡でも上るやふな場合がないとも限れないから。」

絹子は何氣ない体に云つて、それとなくお露の顔を見守つた。

「左う〳〵、私……と仕た事が、肝腎の名前も申上なくつて、勝手なことばかりをいつて、全く何麽か仕て居るやふですよ、ホヽヽヽ行重お露と記してあります、今では宿も亡なつて、女戸主で居りますが、偶にはチトお遊にねね……汚い所で御座いますけど。」

「何れ一度は近ひ裡に、お訪ねすることもあるでせう、今日はこれで別れるとしても……。」

「甚麽かさう遊ばして……併しねねお孃樣、此所で今日私が貴孃に、お眼にかヽりましたことだけは、只今のお母樣には被仰ないで下さいまし。」

「それはモウ妾しだつて。」

と両人が話し今や途切れて、互に椅子を立ち去らふとする際である、絹子が後の楠の樹の下から。

「お嬢様!!!其戸ですの。」

「ねッ。」

と振り還つて四邊を見ると、何時しか下婢のかねと云ふのが、楠の樹の下に立つて居る。

(二)　絹子と侍女、坂神電車の裡

「其所に居るのは於かねぢやなくつて？。」

「左うで御ざいますよ。」

と返辭をしつゝ小走に於かねと呼ばれた此方の待女らしいのが近寄る。呼んだの

は絹子であつた。

「矢張り宅に忘れて居たんでせふ。」

「左うで御座いましわ、離れ座敷の床の上に其の儘置てありました。」

「まあ、宜かつたことね、妾心配仕ながら待つて居たわ。

「ですけれども、他家ぢやありません、御本宅のことですから、豈夫に無くなるやうな事は……。」

と云つて侍女の於かねは何やらん、小さい赤い帛紗包を恭しく絹子にッッと手渡しする。

「あれッ、紛失る心配ぢやないのよ、併し其は左ふとして、これを忘れたばつかりに、西へ歸るのが遲くなつたよ。」

「左うでございますことね。」

於かねは傍から愛相よく受答をする。絹子は今日午前に、侍女の於かねを連れて

中の島の本宅へ還つて用事を濟して、再び御影の別莊へ出向く途中、置忘れた物が有るとの事で、梅田阪神電車停留場から、本宅へ引返す電車中で、用向は於かねを遣ひ、自分は瓦斯會社の前で降て、中の島公園で侍女を待合ふ約束なので有つた。

絹子がこの公園に來た時は、一しきり殘暑の夕日が眞夏のそれよりも烈しく、ひろ〳〵とした両側の河面一帶に燃ね立つて居た、それが忽ち燈の光の消へて行くやふに、四邊は全體に薄暗く灰色のやふに變じて來て、滿ち來る夕汐の上を滑つて行く巡航船と荷船の甲板が眞白く際立つた、と見る間もなく、初秋の黄昏は幕の下るやふに早く夜に變つた。絹子は小さな聲を出して。

「かねや、早く行かうよ、電車の乘場まで。」

「左う致しませふ。」

と二人は足早に公園を西に扱けて、大江橋の南詰を市電車停留場から飛乘つたが間もなく梅田で降りると同時に、再び阪神線に乘り換へて、今しも御影に向ふ電車

中の人である。出入橋も越へ、福島も過ぎ、今や新淀川の鐵橋に電車が、渡りかけし折柄、絹子は侍女を見返て、

「かねや。」

「諾い。」

妾今日お前を公園で待合す間に、珍しい人に出會つたのだがね。」

「左うでございますの。」

「かねは見なかつたの、妾が話して居た婆さんの人をサ、妾の隣に居たでせう。」

「ねゝ、お見受しました、彼の方何所の御人で仰在のですか？。」

「彼は高津の裏門の人よ。」

「オヤまあ、孃樣の御存じの方ですの。」

「左うと云ふ譯ぢやないけれど。」

「ホ、、、、。」

「かねつたら直ぐに何でも笑ふから不可わ。」
「でも、貴嬢御存じで仰在やふで、又左うでも無いやうに被仰ぢやございませのホ、、、、。」
「其れ又お笑ひだわ、笑はないで妾の云ふことをまあ能くお聞きよ。」
「ねゝ、其れはモウ能く承りますわ。」
と稍や於かねは眞面目顔になつて、絹子の方を屹度向く。
「左う何も向にならなくつても可いわ。」
「いね、私別に向になつた譯ぢやないのですよ。」
「デモ、能く承りますわなんて、切口上で出られると、何だか氣が惜けて向になられたやふに思はれてサ、妾話が仕にくいわ」
「お嬢樣、貴嬢先刻云つたのは、妾あれは戯談半分に申ましたのですよ、お氣障になれば御免遊ばして下さいましな。」

「氣には何も止めやしないけれど。」
と云つて絹子は俛首れて了つた、二人の話は茲に一寸途絶たので、侍女の於かねは恐る〳〵、主人絹子の樣子を見て、心甚だ安からず。不安の面持に恐縮すること夥、折も折とて背廣服の車掌が。
「西の宮でござります、御降のお方は御忘れ物の無いやうに願ひます。」
と注意の言葉に待女の於かねが、不圖此方を回く途端に、膝の上の風呂敷包を下へ落す、周章て彼は元の膝に、漸やく拾ひ上げた際、前の車掌は又。
「動きます……御危ふござります……次は香櫨園でござります……御降りの方はお忘れ物の無いやうに願ひます。」
同じやうな事を云ふ中、電車は次第に速力を早めて西へ〳〵と疾走するので、香櫨園も既に過ぎ、今又更に住吉と呼ぶ聲を聞く折から。
「まあ、早や住吉だわ。」

と絹子は侍女を顧て云ふと、於かねは主人の機嫌が直りしと見て、面滿笑み合んで今度は氣輕に、

「左うでございますよ、電車は眞實に早いですね。」

「全くよ、先刻は香櫨園だと聞たばかりだのに。」

「お孃樣モウ直ぐ歸れますわ。」

「この次の降り場だわね。」

「左うですとも。」

「宅では壽さん、妾の還りを待つて居るわね。」

「壽樣もですけれど、坊樣や乳母やのお近どんまでが待つて居ますわ。」

と云ふ折り電車は御影町の中央に着いた。此所で乘客は一仕切り降た、その中には絹子と侍女の於かねも降りた、されど所が田舍だけに附近には一輛の車も居らぬ。二人は今降りた前の細道を、山手の方に昇つて行く、間もなく師範校の前を過ぎ、官鐵線の踏切をも越ねて、二丁ばかり細い野道を辿つて行く、其の遙か右手の所に、新い別莊の門前には、瞭然とは分らないが、三十路餘りの肥滿した女が、愛くるしさうな兒供をつれて、車を見つゝ立つて居る。絹子は不圖行手を眺めて、後に從ふ於かねを見かへり。

「かねや、彼の門の處に居るのは宅の坊んと乳母やぢやないつて？。」

「ねゝ、何うやら左樣らしいやふですよ、何分瓦斯燈の薄明ですから、確とは譯ませぬけれど。」

「まあ、今頃に、何するつて坊うをつれて、門なんかね出て居るのだらふ。」

「そりや貴孃を迎に出て居るのですよ。」

「だつて、それな壽さんが居さふなものねね。」

「左うですね、壽樣は何う遊ばしてお出るのでせふか、まさか未だお寢みでもないでせうがね。」

恁言ひつゝ二人は門近くまで歩みし頃、太郎を抱きしお近の後から、壽子の姿が突と現はれた、

乳母や、姉さんお還りよ、あゝ於かねも……。」

と愛らしい囁き聲が手に取るやふに耳に入る　絹子は莞爾と頬笑んで。

「かねや、壽さんも居るよ、聲がして居るわ。」

「矢張り壽孃樣もお出になつてますの。」

「あの通り、姉さんと呼んで居るよ。」

「オヤ、眞實に左うで御座いますわ。」

「左うよ、壽子の聲よ。」

主從の道行く話終らぬ中に、二人は別莊の門前に着いた、すると彼の三十路餘りのお近と云ふのは。

「オヤ、お孃樣お還り遊ばしませ、豪う御緩りで御座りましたのね。

「あゝ、乳母やか、大層遲くなつてね。」

「私御門迄お迎に出て居ましたの、坊ッ樣と壽孃樣が、頻りと姉樣〳〵とお焦れ遊ばすものですから　ッィ戸を引寄せましたなりにして。」

「左う……御苦勞だつたことね。」

と絹子がお近を見返つて云へば、十二三の乙女子の壽子と云ふのが、

「姉さん、今……妾大變待つてたのよ。」

云ふ尾について又其の下の太郎と云ふ五歲の可愛のが、凉しい聲で。

「大きな姉ちやんが、おかへり……。」と、

片言葉ながらに云ふ、絹子は兩方から一時愛相好く恁麼云はれて何の兒の方へ先に返辭を仕て良いやら突つ追の思案をして。

「妹弟とも姉さんのお留主して、それでお迎に來て呉れて、大層お怜悧たつたことね。」

妹の壽子を見て云ふと、太郎は腑に落ぬと云ふ顏付して。

「姉さん、坊うも。」

と乳母の背から顏突き出して姉の絹子の美しい顏を覗き込むやふにする。

「ホ、ヽ、ヽ、坊うも？、賢いことね。」

絹子は弟の太郎を愛して頭を撫る。

「さあ、早く内へ這入りませう。」

お近は一同を促して門の戸を開く、其れと同時に五人の姿は別莊内にかくれたが、外には唯瓦斯燈の光のみが、秋の夕風に煽たれて、人影もなく、四邊は深々として居るばかり、時折別莊の門標が、瓦斯燈の光りに照されて五百井太兵衛別莊と印してあるのが、チラホラと見ゐて居る。御影の濱には浪の音高し、摩耶の山風徒らに吹き颯すのみ。

（三）五百井家本邸と御影の別莊

中の島四丁目、田簗橋の南詰を、少し東に寄つた所で、當時舶來雜貨品の、直輸入の卸問屋、屋號を奈良屋と呼ぶ屈指の資産家、五百井太兵衛の本邸と云へば、土地では誰知らぬ者もない、加島屋住友鴻池などに亞、第二流の豪商で、その本邸は堂島川の、滔々たる碧水に面して、奥深く建てられて有る。

主人の太兵衛は今年六十一と云ふ、赤頭巾の還暦の祝筵　漸やく春の暮れに濟んで、後妻ではあるけれどお貞と呼ぶ、四十といふ年違ひ、子供は先妻の娘の絹子と壽子、お貞の腹の太郎といふ男女三人。姉は今年廿一歳、妹は十三といふ美し盛りで、弟は漸く五歳の椀白盛りである。

今年の夏七月の末から、太兵衛夫婦は濱寺の別莊に暑を避けて、宅は譜代の老番頭、權助と云ふに任せて於て、娘二人と乙子の太郎は、乳母のお近といふのが從ひ

て、御影の別莊に暑を避けさせた、娘姉妹は豫てから、仲睦じい間柄、打連れて此の別莊に來て起居するやふに成つてからは、宅ではッイぞ見受けられぬ、太郎の乳母のお近を相手に、四方山の話、果は笑談の有だけを云つて、時ならぬ別莊の內は大陽氣に、笑ひ暮した日もあつたが、それは既に過去となつた。

折から世は秋に入つて、菊の花匂初めて五日目の夜であつた、乳母のお近は太郎を寢床で、添乳をして居て、長姉妹は椽に据ゑた、一つの長椅子に打倚つて、月清い孤津灘の、海の面を打眺めて居たが、絹子は風に縺れる後毛を搔き上げながら。

「好い月だ事、何だか寢るのが惜しいわね。」

と小い妹の壽子を相手に、つく〳〵とした言葉。

「ホ、、、、、。」

と壽子が無邪氣華かな笑ひ聲。

「それなら姉さん、貴姉此所で夜を明すといゝわ、私しも一所にお附合してよ。」

「だつて左うも、不可いわ。」

「姉さん何故に？。」

「壽さんが寢たくなると、妾一人ぼしになるわ。」

「いゝね、決して寢たくならなくつてよ　屹度〳〵姉さんにお附合するわ。」

「だつて左うよ、壽さんの屹度は確的にならないもの、お附合も便りないわ。」

「ホ、、、、、。」

と壽子は乂愛相好く笑ふ。寢室では太郎が全く寢就たと見ゑて、乳母のお近が次の間越しに。

「大層お浮かれのやふですね、御姉妹ともに。」

と云ひつゝ自分も椽近く出て來て　姉妹の樣子を一寸見ながら、絹子の遙か下手に座る。

「乳母や、風は少し冷やつくけれど、あの冴へ切つたお月樣は好いでせふ。」

「全く好い月ですことねね。」

「其御覽なさいな、煙深い大阪に居ては迚も這麼思は出來はしないわ。夏の日の風だつて暑いのだもの、是だから妾は何時も田園生活をして見たいと思ふのよ、乳母やは如何思ひだか知らないが。」

「全くね、私も大阪なんぞには住みたいとは思はないので御ざいますわ。」

「でも田舍ばかりに引籠つて居ると、又飽きるかも知れないわね。」

「或は左うかも知れないですが、電車や汽車の便利もあつて、電信や電話の自由も利き、西は神戸の繁華に近いこの御影、それに東は大阪に近い、恁麼田舍に住んで居れば、別に飽きもしないだらうと、私なぞは思ひますわ。」

「乳母やは須磨は如何思いだね、父樣は彼處にも別莊を建るとお云ひだけれど。」

「私し達は何所が惡いとは思ひませぬわ。」

「須磨も可いけれど、少し遠いわね、それに同じやふな海濱で濱寺にも別莊がある

もの、殊に濱寺の別莊は松林の中で閑靜で好いわね。」

と二人の話は此處に絶えたが、椅子に凭れて居た壽子は月を仰ぎながら。

「姉樣!!! 父樣や母樣も、此月を見てお出なさるのでせうかね。」

「ホ、、、、坊見たいなことを云ふよ。其は左うとして、壽さんは何故濱寺へ行かなかつたの。」

「如何して?。」

「でも其方が可かつたのに、母樣も居られてよ。」

「けれども姉さんが此處にお出でなんですもの。」

「妾と一所の方が可いの。」

「ねゝ左うよ、母樣は坊のだから……。」

「ねッ!!! 壽さん!!。」

と姉は妹を引寄せて抱締めた、そして壽子の面をつ〳〵と打目戍る、その眼

には一種の暗雲が俄に襲ふて、晃りと一滴壽子面に露を注ぐ。

「壽さんは、其ほど妾が戀いの？。」

と、姉は又更に恁麼問ふた。

「ねゝ左うよ、妾一生姉さんと一所に居たいわ。」

「デモ、那樣事は出來はしないよ。」

「左う……。」

と壽子は一寸思案に窮して、言べき語を心の裡で搜し需て居たやうだが忽ち。

「姉さん、妾母樣と一所に居ると、何時も母樣から叱られ通しに叱られて居るのですもの。」

「まあ、では妾と一所に居るよりは、母樣から叱られる方が嫌なのだね。」

「あれッ、左うぢやなくつてよ。眞實に姉さんと一所に居たいのだわ、私は姉さん好きだから何時までも放れともなくつてよ。」

と壽子が無邪氣心にも、繼母の冷かな情愛に引きかへて、嗟い姉の熱情を酌み知つてか、凭れし姉の膝の上に、熱い涙を二三滴。

「壽さん、何泣て居るの。」

「私泣て居やしないけれど、姉さんのこと思ふと何だか悲しくなつてよ。」

「ホ、、、、。」

と姉は太郎の乳母の手前、態と何氣なき体をして、華かに笑ふて見せたが、心の裡では壽子の今の言葉を聞かざれば身も世もあられぬ程に斷腸の思ひ、口にこそ云はね面の色に瞭然ノ〳〵と解る。稍立つて姉の絹子は、面伏せに乳母お近の顏を見てそして其視線を更に又壽子の方に轉じさせて。

「壽さん、今のやふな事モウお云ひでないよ、坊の母樣は壽さんも妾しも皆一所のだから。」

と姉がたしなみ顏に言へば、壽子は輕く頷ひて、

「ねゝ　左うよ、皆一所の母樣なのよ」

「ホホ、、、。」

と絹子が笑ふ尾に附いて。

「小孃樣つたら何でも上手に被仰ことね、眞實にお話は巧まいものですよ、ホ、、、、。」

乳母のお近も傍から笑ふ　折から門の戸が開く音がして、少焉すると臺所から待女の於かねが。

「お孃樣　御本邸から御書簡が……。」

云ひつゝ封筒を恭しく、絹子の手に捧げまつる。

「あゝ　左う。」

と絹子は之を請取つて、蓙洋燈の傍へ倚つたが、何だか意に解せないと云ふ体で唯一度封筒の裏面を一寸眺めたなりで、容易に開封をせふともせず　直ぐ其所を立つて、元の長椅子に倚り添つて、誰に云ふともなく、

「父樣からの御書簡だわ。」

「……」

傍に居るお近も於かねも、默つて居つて返辭をせない、壽子は姉の顏を見目戍り

「姉さん、父樣から御書簡は、甚麼こと云つて來ましたの？。」

「甚麼こと云つたつて、まだ書簡は開て見ないのだもの、」

「あれッ!!、左う……。」

と壽子は眼を丸くして、又更に姉の面を覗き込むやふにする、その顏はモッ月も見飽いて、何かも眠氣を帶て居るので、姉はソッと長椅子を離れて突起た儘。

「壽さん寢室に行つて臥ませな、先刻に十時を打つたから。」

「ねゝ、姉さん左うしてよ。」

姉妹は恁麼云つてその樣側を一つ曲つて、左り手の六疊の室へ這入た。少焉時間

を經過した後、待女の於かねが戸閉旁以前の椽鼻に來て見ると絹子は妹の壽子をかせて、自分は机の前に座り、前刻本宅の父から屆いた、書簡を開封て頻りと見て居る。その書簡は父から來たばかりではなかつた、同じ封筒の中から又一封、更に小さな封筒がある、これは去年の春の頃、或る人の媒酌で、南河内の八尾の富豪、磯山家の嗣子繁美といふに絹子は嫁して、其後半年程を過てから、良人の繁美は育英の任を帶びて、遠い蒙古に行つてしまつた、留主は絹子が引受けて、良人の出發後三ヶ月は、舅姑の折合も至極平穩、小姑との中睦まじく、平和な家庭を作つて居たが、幸福を嫉み運命を呪ふは、慘たる人生の弊習ではあるけれど　可憐絹子も此の弊習の手に捕禽となつて、間もなく保養を楯に言ひ立て今は實家の別莊に有る身、その良人の繁美から、一通は來た書簡である。

絹子はこの書簡を讀み來り讀み去つた後、尠なからず悲愁の面持をして、自分は何故に斯うも不幸し沈吟せねばならぬのであらふかと、躬ら其の故を責るものゝ如

くして、ホッと一息吐て又、良人繁美の手簡の上に眼を注ぎ、再度にして涙を拭ひ三度讀で息を呑んだ、四度繰り返へして讀み行く中、期せずして遂に其の場に泣き伏した。

（四）　御影の別莊、姑の來訪と絹子

其翌朝の事であつた、何時も早起を好む絹子が、九時の時計が鳴歌んで、殆ど半時餘りも經のに、召使の人々に顔を見せぬのみならず、何應云ふものか今朝に限つて、妹の壽子までが顔を見せぬ。

御影の別莊は邸内は廣いけれど、其の比較に建物は大きくない、八疊の座敷と六疊と、其れに三疊の玄關の間と、六疊の臺所があるばかり、之れに少し山手に隔てゝ八疊と十二疊の離れ座敷が建つてある、別莊の構造に就ては、主人の太兵衛と云ふ人は、二階建を好まないとの事で、凡ての別莊は皆な平家建の清洒とした造りで

ある、絹子と壽子は何時も中の六疊の間が氣に入りで、此所へ來れば姉妹の室を此の六疊の間に定めて居る。弟の太郎は臺所の脇に、別に室が取つてあるので、乳母のお近が附添ふて、毎夜早く此の室に這入る、待女は何時も臺所と云ふ順序で、別莊とは云ひながら、大阪の本邸の家風と、大差のない規律である。乳母と待女は、朝餐を仕舞て跡方付もして、何時の如く太郎を連て、邸内の樹木、さては殘んの草花などを見廻はるのを、日々の運動として居るので、今しも又其運動に、出やふとする頃であるに、猶且姉妹は顔見せぬのみか、室は寂莫として何の氣配もない、であるから乳母のお近も、何となく氣掛りになつて、默つても居られぬと見ねて、自分と向き合つて座つて居た、待女の於かねを呼んで、意外な出來事でも湧出たやふに窃〳〵と云ふ。

「ねゝ於かねどん、孃樣お姉妹は、今朝に限つて何故恁麼に御日起るのが遲いのでせうね。」

「何麼が遊ばしたのではないでせふか。」

「だつて、御健康は何麼もないのに。」

「でも急病でも起つて。」

「那麼ことは決して無いは、壽孃樣も未だもの。」

「でも、何時もなら今頃は、何ぼ何んでも御日起つて居られますよ。」

「ねゝ左うよ、何時もならば今頃は、如何なることがあつたとて、モツ御日起つて居られない事はない筈ですのにね。」

と兩人の囁き聲は期せずして一致した、互に不審さふに顔見合して、今度は於かねが口を利いた。

「甚麼でせふねお近どん、一度孃樣の御室口まで、一寸御樣子を伺つて見ませふかね。」

「其も餘り失禮だと思ひますけれど、と云つて此の儘に、默つて居つて若しもの事

があつた節は、孃樣達お姉妹に濟ないばかりではなくつて、御本家の旦那樣や奥樣に對しても、猶旦此方兩人の落となりますわね。」

「眞實に左うでございますよ。」

「では一寸御居間の口まで、ソッと伺つて見ませうか、それとも外に於かねどんが何ぞ宜い考はなくつてか。」

お近は恁麼云ひながら眼を丸くして、於かねの顏を見詰て居る。

「外に宜い考と云つたつて、私卽座に思案も一向に出ませんよ。」

「ちや仕方がないわ、若し孃樣からお叱りを受けたら、其譯を申上るとして、兎に角私が伺つて見ませふか。」

「では左うして頂戴よ。」

「だけれど、孃樣は於かねどんを御好きの樣だから私では返つて御氣に障るかも知れないわ。」

「だつて其麼ことはないわ。」

「左うでせふかね。」

「ねゝ、左うよ。」

「それぢや私御居間の口で、一寸伺つて參りますことよ。」

「ねゝ何うぞね。」

と兩人が詰らぬ抑問答する裡にも、時間は徒らに經つて行く、正しく時計は十時に近い、然れど絹子と壽子との姿は見へぬ、否な姿所ではない、皆無聲さへ上らないのである、で遂にお近は太郎を抱ひて、絹子の居間の前に來て、閉めてある襖の外から、

「お孃樣〳〵。」

「……。」

と調子低く聲を掛けた、中からは返辭がない。

「でもお孃樣は平素から、お聲の低い方であるから御答があつても私が能く聞き取らなかつたのぢやあるまいか。」

お近は恁麼獨言して、又更らに。

「お孃樣……未だ御目醒ぢや、御座いませんの。」

「乳母や？。」

今度は慥に返辭があつた。

「御目醒で御座いますか。」

「はあ、何ぞ用向なのか。」

「否ね、別に左うでも無いのですが。」

「誰か人でも有つたのかい。」

「否ね、餘り御目醒が何時となら御悠りで仰在るやうですから。」

「はあ、夜前は何だか眠られなかつたわ、それで恁麼に所在なく、今朝ばかりは起きかねたのよ。」

「まあ、それなら宜いですけれど、大變御悠りなものですから……。」

「それで心配して呉れたの？。」

「左うと云ふ譯でもないのですが、モウ安心致しましたよ」

「濟なかつたことね、今に其方へ出て行きますよ、序に於かねにお湯を取らせて頂戴な」

「畏りました……併し御免遊ばしませ。」

と、お近は云ひ捨て勝手へ退つた、絹子は先づ自分から起きて、そして妹の壽子を起こす、

「壽さん、モウ起なさいな。」

「ねゝ、直起てよ。」

「直起るの、ぢや先にお顏を洗つて來なさい。」

「ね、然うしてよ。」

可愛く素直に返辭をして、壽子はチョコ〳〵と走るやふに臺所の方へ行く、絹子は其所に座つた儘、寢亂れ髪の束髪を、机の上の鏡取り寄せ、両手で一寸搔き上ながら、不圖、膝の下を見ると、昨宵讀んだ書簡の端に、磯山繁美の四文字が眼に入る絹子はハッと胸踊らせて、急遽に其手簡を手にして、讀殘こしの一所でもあつたかのやふ、又今更に其文体を、つく〴〵と眺め入つて、少しは悲愁の面持を見せたが遂には又其の手簡を卷き納めて元の封筒に差入れた、軈ては其の文柄に接吻して、懷しさふに手筐に納れた、折柄誰かが來る衣摺の音がする。

「お嬢樣、御目醒!!!。」

「オヤッ、誰かと思つたら於かねだわ。」

「諾い、かねですよ御居間のお掃除を致しませふと存じまして。」

「左う、御苦勞だことね。」

「ホ、、、、、、何の御遠慮が入ますものか。」

「だつて毎日氣の毒だわ。」

「まあ、お嬢樣の御遠慮深いことゝ云つたら、眞實に恐れ入りますわ。」

「ホ、、、、。」

と絹子は近頃にない笑みを漏らして居間を出で行く、勝手元ではお近が居て、姉妹に供する朝餐の仕度に取りかゝる。緩やかな朝風は樣桁に吊された風鈴を吹いて、宛然秋の淋しさと冷氣を身に覺へるやふである。其風鈴の幽かな鳴り音が、不圖と途切れて閑靜になつたかと思ふ折しも、新い旭の光り櫺子窓に漏る玄關の入口に誰やらが訪れ來た聲がするので、乳母のお近が心得て出て見ると、年頃は四十二三の、少し痩形では有るが上品な婦人である、お近は徐かに障子を開けて両手を支へ

「御出遊はしませ。」

客に對して先づ優やかに云へば。

「御免を下さいまし、早くから參りまして。」
「貴婦は何誰樣でお出遊ばしますか。」
「あの、妾は河内の磯山からのもので。」
「左樣で仰左いますか、磯山樣と申上ますと……。」
とお近が恁麼念を押して聞くのを客は見て取つて、
「五百井樣の別莊は此方でせうね。」
半信半疑のやふに云ふ、お近はそれを。
「諾い、左樣で御座いますよ。」
と至極言語の儉約をして答へる、すると客は又、
「では、絹さんはお在ですか、妾は磯山のふさと云ふものですが。」
と云ふ折り玄關の入口へ、一人の車夫が餘り大きくもない風呂敷包を提て來て、庭に立つ客を見て、

「御家樣、御荷物を……。」
「あゝ左うかね、御苦勞だつたことね。」
「否ね、何う致しまして。」
云ふ中に客は先づ帶の間から合財袋を搜り出して、幾らかの白銀を渡すと、夫の車夫は、
「何うも有難う。」
の一點張りを二聲三聲、云ひ捨にして出去つた、お近は此婦人の樣子を見て、始て心付し如く、
「兎も角何卒これまで御上り下さいまし、直ぐ奥へ傳へますから。」
「では左うさせて頂きませう。」
「何うか左う遊ばして。」
と云ひ殘してお近は絹子の居間に行く、客の婦人は玄關の間に、姑く待つ程もなく

再び出て來た乳母のお近は、

「お待せ致しました　さあ何卒……。」

客間に透ひ行かふとして、共に立つ間の襖を明る際、中から絹子が、

「あらッ、お母様……。」

（五）別莊を訪ひし姑の意向ご密談

枯色を帶た芝生の上に三四株の楓樹、燃立つやふな色をして居る。根元の碧島石が胡粉の刷で一摺撫たそれの如ふ、薄すりと縞を畫いて、白沙の敷物の中央に悠然と陣取つた風情、此方の飛石の間からは、蒼黑やふな熊笹の葉が、鉢前の寒竹を眺めて　其の幹の低きを恨み面の配合、清洒として雅致多き庭を、枯萩の幹で造つた籬で圍んだ、一方に新しく建られた離座敷の八疊の客間、引棧の美い障子建詰、風の漏る隙間もないので、裡の樣子を窺ふ樣は、無論出來ない事ではあるが、形こそ

見ねね瞭然と、障子の外に手に收る如ふに、漏れて聞ゆる話聲、是ぞ慥に絹子と客の、磯山房子刀自である。云ふまでもなく絹子のためには豪仇讐のやふな姑、では有けれど流石は女だけに、話振りが優しく聞ゆる。

折柄程遠からぬ住吉の停車場で、十一時何分かの行き違の列車が、滊笛を双方から吹き合ひながら摺れ違つた。間もなく御影の師範校では、正午を報ずる鐘の音が一つ二つ又一つと、漸次に十二點を打つ、日脚は庭の籬を越ねて、客間の樣に這昇る頃、薩摩杉の開戸が、廊廻の此方で左右に開くと、戸の蔭から半身を現した女がある、小柄ではあるが色の白い、眼元の涼い口元に愛のある、年頃は十六七、結てから四五日も經、低い島田髷に桃色の丈長を、ポッと後へ跳出してかけて、洗張ではあるけれど絲縞の袷に、瓦斯織博多唐縮友禪の晝夜帶、小ぢやんと文庫に結んだ上から、緋毛斯の帶揚品好く締た小間使、両手に高く持運ぶ午の膳部、胸の邊に持つた儘、駒下駄の足音徐かに、飛石傳ひに二足三足、客間の方へ近寄りながら、

不圖四足目の飛石の上に、唐繰り人形のやふに立ち止つて　突と裡らの話聲に聞耳を立てると、房子刀自の聲として、

「ねゑ、絹さん、妾の云ふ事は取りやふに由つて、或は酷く聽ゑるかも知れないが今云つた繁美のことは、良人が承知を爲さらないのだから、それを強て妾が甚麼せふと云ふ譯には行きかねるし、眞實に妾しも困つて居る次第のだから、絹さんも惡く思はないで居て下さいなね。」

「左うですとも、決してお母樣が彼是れとは思ひません、お父樣の被仰ことも御無理とは聊かも思ひませんけれど、今度に限つて蒙古から、良人が那麼手簡をお父樣ゑ遠慮もなくお越したとすれば、それは妾が良人に對する、凡ての仕向が不注意なからでありますわ。」

「左うと云ふ譯ぢやないけど、」

「否ゑ、全く左うなので御座いますわ、何事も妾が及ばないから起る事です、何

卒御免遊ばして。」

「絹さんに左う云はれると、何んぼ母でも妾はお卿に氣の毒で、合す面がないやふに思ひますのぢや、當然なら貰つて間の無い嫁だから、假令良人が何と云ほふが姑母の妾が立場としては、更ら〳〵卿に此のことは、聞かす所では無い筈ぢやが喃。」

「否ゑ、左うでは御ざいません、早く聞かせて戴いた方が、妾い心得になつて結局は良人にも心配させなくつて、お父樣の御機嫌も損じないで濟むほうですから、凡てが宜しうふ御座いますわ。」

「絹さんが左う思つて居てお呉れなら、妾は世間の人々や、内外の人に對しても、申譯は立つと云ふものぢやけれどね。」

と此所でパッたり話聲が歇んだ、飛石の上で最前から此の話を、無意識のやふに聽て居つた、立ち姿の小間使は、銜めて居つた眉を開ひて、樣子は更に知らぬ振して

客間の椽際に足音高く歩み寄つて、手に持つ膳部を椽の此方に、コツソリと置ひて障子際の外の邊で、小腰を屈めて両手を突き、然も優やかな聲の言ひ振り瞭然と、

「お孃樣、御免遊ばせ……。」と

云つて彼は暫く中の應答を待つ、間もなく絹子の涼い聲が外に漏れる。

「はあ、何誰？。」

「かねで御座いますの。」

「左う……では御免蒙つて其所をお開けよ。」

「豪い失禮ですけれど……。」

と云つゝ於かねは障子を徐かに二尺程右に開けて、躙り込やふに客間へ這入つて、

「お孃樣。」

「ねゝ？。」

「只今恰度お正午ですが。」

「左う、最前の出來たの？。」

「御椽端まで運んで居りますが。」

「では、直に此所ねね。」

「へね、承知致ました。」

於かねは窃つと椽側へ出る、絹子は姑の房子刀自に

「お母樣、失禮ですが御晝飯に致ませう？。」

「絹さん、折角だが妾、宅を出かけに喰べ直して、直と汽車で來たのだから。」

「でせふけれどお午ですから、御麁末ではありますが、折角拵らへさせましたのです。」

「でも宜い話に來たのではなく、恁麼詰らぬ用向に來て、御晝飯なんか頂いては、歸家てから良人に叱かられるかも知れませんな。」

「お母樣、御話は御話です、其に拘はつた事は御座いませんわ、殊に兒の妾が所で

御晝飯を差上たからと云つて、何んで舅父樣がお姑母樣を、お叱遊ばすものですか、那麼こと被仰なくて、何卒召し喫つて下さいまし。」

「でもねー、妾は心配するが喃。」

「それはお姑母樣の思ひなしですわ、殊にお舅父樣は彼の通り而白事ばかり在仰て何事でも左う氣になさらない方ですから、豈夫お姑母樣をお叱り遊ばす樣な事は萬ないと存じますわ。」

「絹さんが其程に云ふてお呉れなら、折角だから、頂戴仕ませふかな。」

と房子刀自は漸くに、絹子等と共に膳に就くことゝは成つたものゝ、其の言ひ振りは心に根のある、物に故障る言葉の數々、素より絹子は覺らぬではない、昨宵中の島の本宅から、實父太兵衛の書簡に依つても、今日姑の房子が來て、自分を苦るると云ふ事は豫期せざるまでも、絹子が磯山家に嫁し就た以來、姑其人の性質に就て、豫て窃に研究したこともあるので、絹子は彼の意地惡るき拗根性であると云ふことは解して居る。で絹子も姑に接する場合は、腫物にでもさはるやふ、注意の上にも注意して、何事も優やかに、微蓮も彼が氣を逆はない、柳に風の態度で居る。それも他の事ではない、良人と云ふ戀い人のあればこそと、何時も絹子は斯う思ひ定めて、身を切るやふな酷い心棒もするのである、それと何時も良人が不在なる頃は舅が良人の性質に似て居て　優しく慰安を與へて呉れるので、少しは、心を慰て居た、けれど今日突然に姑が來て、舅の言を楯に取つて、自分を斯う迄苦るとは、更らに豫期して居なかつたらし。

では有るが絹子の平素の性質から割出せば、萬事を溫和の氣質だから、餘りに多くを言はないのみか、凡てに言葉は控目にする。

姑の房子が今日不意の來訪は、絹子のためには小姑に當る、靜枝自身から起した事で、結局は絹子と繁美の愛情を裂ふとするための內意に外ならぬ。

其は我兒故に迷ふ房子刀自の、淺果敢なる考から出た事ではあるが、絹子を繁

美の嫁として撰んだのは、當人同志に思ひ合つて居つた事は、無論言ふまでもない事實なるも、其以上に撰んだのは、繁美の實父其人である、其理由とする處は、第一絹子は優秀の才があつて、常に浮たな意なく、思慮深くして物事に沈着が有り、而も女一通り、藝術に就ては、凡てに奥を極めて居る、學問は高等女學校だけではない、某女學校、家政科も卒業して、天晴未來の良妻賢母で有ると見て取つたのと、其の他は繁美の父と絹子の父とは、永年淺からざる知合なので、斯る娘を我兒の嫁にと氣差したのも、強ち磯山老主人の無理な注文ではなかつたのである。

然れど磯山繁美は今の房子は繼母である、繁美の同胞と云つては唯一人、腹違に出來て有る靜枝が有るのみで、絹子の磯山家に嫁し就て來るまでは、兄妹仲も平和であつた、それが絹子の來た以來、何うかすると兄妹喧嘩を行るやふになつて、其度毎には絹子が仲裁の板挟みとなり、絹子は人知れず涙の袖を、蔭で絞つた事もある、恁麼場合は眞の無頓着に引換へて、姑の房子は直ぐ干渉をするやふになつて

果は我が產し妹靜枝を呼除けて兄の繁美を惡し樣に罵り、其の余波は必ず絹子の身の上に降落る。何んぞと云へば二口目には、姑の房子が「嫁の心得が惡いから、正直な息の心得が狂ひ出すのだ。」と言ひ振らすやふな事は、絹子は屢々耳にした事もあつたが、それさへ良人に告口をしたことは、絹子の身の上には微塵もなかつた

絹子と云婦人は萬事が恁麼風である、磯山家に居る頃も、實家の別莊に來て居ても、絹子の敵となるものはない、召使の水仕女に至るまで、絹子に待きては、敬意を拂ふばかりでなく、「お孃樣は御怜悧で、御優い方で有る」と一人として云はぬものはなかつた程、であるから此の日の絹子は、殊更に我意を曲げて、姑の房子へ對する應接振と待遇の凡てに、何一點非難を打たるゝ事はなかつた、流石の房子も此の日ばかりは絹子へ彼是れと云ふ一分の隙もない。

軈て一同午餐も了つて、小間使の於かねが來て、

「其では御引申ます。」

と食盡しの膳などを引ひて、すぐ其の後へ香の好い密柑渦高く盛りし一籠と、格好の茶盆を運んで、勝手元へ引退る折りしも、客なる房子への愛想に、

「貴女、チトお嬢樣とお庭でも御散歩遊ばしては、如何で御座いませうね。」と云へば、房子はジロリと白眼勝に、小間使の於かねの面見て。

「妾のやふに年を取ると、兎角不性で、庭などは歩きたくなく、口だけ達者に饒舌りますぢやが。」

と奥齒に物の何こやら、味噌の中に骨の返辞、於かねはパつと顔赤らめて、

「へね、左うで被入ます？。」

を口の中で、輕く云つて引退るを、それと見て取つた絹子は、厘物に觸るやふに

「お姑樣、かねが何か申まして、御氣障りなれば御免遊ばして下さいまし。」

「否ね〳〵、左うではありませぬが……。」

と何んだか他に意味有り氣な言葉づき、絹子は其所を一寸立つて、違棚の上に有る

繪葉書ブックや寫眞帖などを持來つて、

「お姑樣、これでも氣紛せに御覽遊ばせ。」

と房子の前に差し出せば、

妾　今日は少し氣急きで居りますから、モウ御免を蒙つて、早ふ宅へ還りませふ靜枝も待つて居ませふからね。」

「あれッ　まあ　お母樣御悠りと。」

「デモね、我家は大事で有ますからね。」

と彼は何所迄も意地を持つた、毒々しい言葉である。

（六）庭園の散歩、少女の氣憂

御影の別莊を磯山房子が絹子を突然に訪問せし事の有つた以來、絹子は兎角病氣勝で、今迄のやふに面白く、愉快に日を暮らす事をせぬ、時には四五日も打續ひて

一間に閉籠る事が屢々有つて、場合に依れば妹の壽子でさへ近づけることを嫌ふので、太郎の乳母や小間使の於かねなどは、一方ならず心配をした、ではあるが朝夕に、於かねが絹子の居間に行つて。

「お嬢樣、お藥は如何です、酷くお患いやうならば田舍のお醫者ではありますが、山本醫學士御迎申しては如何でせふ。」

と强ひてとは云はず、謎かけるやふに聞て見ると。

「其程のこともなくつてよ、ほんの一時の風邪か何んかだらふ、藥つて於たつて三日も經ば全く治る、心配仕て呉れる程のことは少しもないわ。」

「でも　御面色が好かありませんわ。」

「それはかね恁麼に寢て居て、早四五日もお湯を使はないからよ。」

「左うでせふかね、でもお苦心申しますわ。」

「だけれど於かねや、妾恁麼に寢て居たつて、別に何所が患ひと云ふではなし、唯

少し氣分が重いと云ふだけだかち、お醫者を呼ぶのもあんまりだわ。」

と一口に退けて了ふ　絹子が平常の性質から云へば、小間使などの云つた事でも、無暗に云ひ退けた事は無いのに、近頃の絹子は、何故か我意を立て通すやふになつた、其癖絹子は寢床の裡で、時々涙ぐんだ面を見せる、是が爲にお近と於かねは、夜となく晝となく、寄と觸ると、絹子　病氣を嚬さして、何となく氣遣はしくなつた樣子。

今日もおかねは正午過た頃、壽子に從て邸内を散歩して居て、両人とも勞れたと見ねて、紅く色なす紅葉の樹の根元に寄つて、陶器製の椅子を、於かねは半巾で蘿打拂ひ、壽子を一寸腰て。

「壽子嬢さん、此所で暫くお休息遊ばせな。」

と　麼けば

「ね、、直其所に行て休息は。」

「早う御出で遊ばせ、大層紅葉が綺麗ですわ。」
「待て〻頂戴な、此花採つて直往くわ。」
壽子は雪見燈籠の背後の山茶花を一枝、小さな手に折り採つて、紫矢絣の被布の袖風に飜へし、緋天鼻緒の雪駄覆き、チョコ〳〵走りながら、右手は頭のお下げのリボン氣にしつゝ、於かねの傍に走り倚つて、
「於かね、これ好い花でせう。」
「まあ、美しい花で御座いますことね。」
と於かねは一寸氣訝な顏をして見せて、
「壽子孃樣、貴女は此の美くしい花、御折り遊ばしたが、それを何う遊ばしますの？。」
「此の花……此の花はね。」
「お生け遊ばすの？。」

「ね〻、左うよ、此花生けてよ。」
「何所にお置き遊ばすの？。」
「姉樣のお机の上によ。」
貴女は是迄那麼こと、一向遊ばさないのに。」
「姉樣、此の節御病氣だから、妾花生けて進げるのだわ。」
「壽子孃樣は、却々お怜悧で仰在ますこと。」
「姉樣は、河内の御老母さんが來なすつてから、阿麼に御病氣がお重くお成りなすつたのよ、だから妾は河内のお老母さんは大嫌だわ。」
「於かねだつて左うで御座いますわ。」
「乳母やは何う思つてお居でだらふね。」
「乳母やも私らと同じことですわ。」
「左う、妾は河内のお老母さんが、姉樣をお苛めなるから嫌やよ。」

「左うで御座いますの、では其の花を早く御持還り遊ばして、嬢樣の御机に、貴女が生けてお上げ遊ばしたら、お喜び遊ばしますわ。」

「ではモウかねや、宅へ還らふよ。」

「左う遊ばしませ。」

とは云つたものゝ、於かねは唯心の裡に、絹子の身の上を思ひ遣つて居る折柄、乙女の壽子迄が其の姉の病氣を獨りで氣遣ふて、彼が小さい胸の裡にも、斯くまでに優しいのかと思へば、於かねは堪りかねたやふに、我身の如く涙にくれた。

「壽子嬢樣、貴女は未だお小さいから姉嬢樣のお心の裡を御存じ無いでせふけれどかねなどは能くお察し申して居ることが有りますのですわ」

「それは甚麼ことなの？。」

「甚麼ことゝ申しても、一寸一口には申されませぬけれど、矢張り磯山樣のことに就てゞすわ。」

「磯山兄さん、姉さんを甚麼かなすつたの？。」

「否ね　左うでは有ませぬけれど。」

「ちや姉さんが何うか遊ばしたの？。」

「否ね、左うでも……。」

「では甚麼ことなのだらふね。」

と壽子は小供ながら姉の身を思ひ詰めて、於かねの言葉を聞く度毎に、つくゞゝと思案に沈む。

於かねは此の姿を見て、モー堪ね得ぬらしく芝生の上に咽び入。それは今壽子が姉の絹子の身を思ふのが如何にも悲慘らしくて、如何しても誠と思はれぬけれども考へて見ると、此子も姉の絹子と同樣、宅には父親があるのみで、情深い母を持たれぬ、それを思ふと御姉妹ともに、末は如何なる運命の手に捕はれるのであらふかと思つたからで、彼は壽子を慰める言葉に窮して、只啜り上げて泣く、おのゝく襟

に熱い涙を吾知らず落すのみである。

於かねは此の場合、可憐な壽子の意中を察し、且絹子の身の上を思ひ遣つては、何事も多くを云はぬ、否な絹子の今の境遇を云ふに忍なかつたのであらふ、それで於かねは、不圖氣付たかのやふ、

「壽子嬢樣、モウ恁麼話は止めませふ、それよりは早く宅へ還りませふね」

「……。」

云つても壽子は返辭がない、で於かねは、

「壽子嬢樣!!。」

と少し聲を勵ませて、云ひつゝ此方を振り向くと、壽子は悄然として俛首れて居る而かも壽子は林檎のやふな両の頰に、熱い涙の流れし恨瞭然〳〵と見ねる。

「壽子嬢樣、貴嬢何う遊ばしたの?。」

と彼は壽子を犇と抱いた、そして尙ほ、

「壽子嬢樣、御免なすつて下さいまし、かねがつい異論なことを申上て、貴嬢までをお泣せ致まして、モウ恁麼悲いことは申上ませんから。」

と云へば、壽子は可愛く顏振りして、

「妾、かねが彼の話をしたからと云つて、何も泣くのではないのよ、姉樣のことや妾のことを、かねが那麼に思つて呉れるのが嬉しかつたのと、かねが何だか獨りで泣いて居るのを見て、妾も悲しなつたのだわ妾モウ泣かないことよ。」

「壽子嬢樣、まあ有難う、貴嬢は此の於かねを、それ程便りに仕て下さいますのね。」

「左うよ、妾お前が一寸でも居ないと、何だか心淋い思ふのだわ。」

「まあ、貴嬢!!。」

と於かねは云つた。さうして彼は更に、

「壽子嬢樣、私は姉嬢樣の今の御身の上と、貴嬢のことが何んとなくお惜しいの

ですわ。」

「お前は姉様のことや、妾などのこと能く思つて呉れてね、實に嬉しくつてよ。」

両人は恁麼泌みりと云つて語り合ふが、其の事は半解して、半は解し得られないやふな、云はば不得要領の話の様子ではあるけれど、これも五百井家と磯山家に縁有る人が聞けば、其大体を解し得る。今しも柴垣の向に身を窃め、六十余りの老紳士両人の話を立聞して、其の語の途切れ〳〵する毎に、何かは知らねど両人の話が、我が身の上に降りかゝるものゝ如く、尠からず氣憂の面持が見れて居る。

されど世際　壽子と於かねは、柴垣の向ふに、彼の人が居るとは更らに知る由もない。

「壽子嬢様、モウ姉嬢様がお待かねでせう、早く還りませふね。」

「ねゝ　左うよ、姉様一人で淋しいわね。」

「左うで御座いますわ、宅には乳母やも居りますけれど、貴嬢が御留主では姉嬢様がねー。」

と話ながら、両人は斯くて庭傳ひに、勝手口から内へ這入ると、蟹所の上り口に、乳母のお近は太郎を抱いて坐つて居たが、壽子の顔見て、

「壽子嬢様、が父様がお出になつてますよ。」

乳母は莞爾と笑つて云ふ、

「あれッ、父様が？。」

嬉しさうに壽子は早く奥に往く、お近は

「まあ。」

と壽子の周章方を見て呆然たやふに云ふたかと思ふと又更に、侍女の於かねを顧りみて、

「まあ、永い間散歩して來たのねね、モウ二時過ぎるわ、何所迄お守して往つたの？。」

「お泉水の周圍を……。」

「廻はつて居たのかホ、、、、。」

「旦那樣何時の間に御出なすつたの。」

「知らなくつて？。」

「一寸もよ。」

「ツイ今し方のことホ、、、、。」

と云ふ折りしも絹子の室より打、電鈴の音二つ三つ、臺所の鴨居に鳴る。

（七）慈愛の父　別莊裡の夜話

電鈴の音に侍女のお兼は直と立つて、絹子の部屋の閾際に両手を支ゑて、

「お召遊ばして？。」

と問ふまでもなく絹子は、

「お父樣のお敷物とお火鉢をね。」

「畏りました。」

とお兼は其所を退らふとする後へ、主人の太兵衛が窃つと立つて、

「此所の紅葉は餘程美しくなつて居るな。」

と突然に絹子へ云ふので、お兼は一寸驚いた風に。

「オヤツ、旦那樣で入らしたの、お出で遊ばしましお久しふ御座いますこと、私只今不意の御聲に吃驚致ましたわ。」

「左うか、併し取つて嚙むとは云はないよハハハ。」

「でも、貴主ホホ、、、、。」

「お父樣つたら、御笑談ばかりホ、、、、。」

と傍から絹子が口を添へる。

「まあ何でも好いから早く火鉢をお呉れよ。」

「お父樣、只今お兼に申して居りますことよ。」
「左うかねね。」
「只今直に、持つて參ります。」
と お兼は退つて勝手に行く。
「絹、俺が前に來た際とならば、お前は酷く痩て居るやふであるが、此の頃何所か患ひのかね。」
「否ね、別に患ひと云ふほどの患るひやふでもないのですが、一寸此所四五日前から。」
「甚麼塩梅なのかい、用心せんと不可ぬよ。」
「有難う御座います。それ程のことはないのですけれど、少し風邪でも襲いたのでせふ。」
「其の風邪でもが惡ひのだ、用心をせずと藥やつて置いては喃、藥を呑んで居るのか喃。」
「否ね、何も……。」
「だから不可ぬ、お父樣などは、何所か惡いと思つたら、重ちぬ前に直ぐ手當をして藥を呑む、から左う大患ひを仕たことは、此の年になるまで有つたことはないよ。」
「左うでせうかねね。」
と云ふ折柄、侍女のお兼は、丸桐の火鉢と新い甲斐座蒲團を持出て。
「甚麼も遲くなりまして。」
と差し出せば、太兵衛は小咳一つして、
「寒い時には火が懇しい、お前達は若い元氣で、火鉢などは入らぬか知ら、俺のやふに年を寄るとね、身に泌〴〵と寒さが對へる。」
「お父樣、若いものでも同じですわ。」

「でもお兼などは暖かさうに、ぶた〳〵するほど能く肥滿て居るからハハハハハ。」

「あらッ、また旦那樣御笑談ばかし。」

とお兼は其儘退つて行つた、後で太兵衛は前の火鉢を引寄せて、銀煙管で一二服莨を燻らしながら、つく〴〵と絹子の面を打眺めて、

「絹子!!! お前は?。」

と改つたやふに云つて、眺めて居た視線を火鉢の中央に落して、

「何か此の節心配することでも有のかね。」

「否ね、別に何も心配なんかありませんわ。」

絹子は恁麼事も無氣に云ふ、けれど、其の實は意の中には、絹子の身に取つては容易ならぬ、大なる問題が横たはつて居るのである、父の太兵衛は疾く此の事を承知して、西の宮の某會社へ商用で來た序に、絹子の手前それとなく、今日此の別莊に來たのではあるが、如何に心隔てぬ親子とは云ひながら、太兵衛は絹子の姿を見て

は、豈夫に明ら樣に夫れとも云ひ出しかねてか、少し言葉に躊躇した樣子である、けれど彼は斯くては折角來た甲斐も無いと、忽ち思案を定めたるが、態と頬に笑みを浮めて、

「絹や、繁美さんから來た書簡、先日俺の書簡と一所に　此方へ廻して措た筈だがあれは何の用であつたのかい、別に聞く程のこともないが……。」

と先づ何氣無き体に云へば、

ほんに、左うで御座いましたよ、何うも有難う御座ました、併し彼の書簡は別に大した用件でも有ませんの、ほんの妾ね時候見舞ほどのものですわ。」

「お前にだけかな。」

「否ね、それはお父樣を始めお母樣や、其の次は妾へで、それから蒙古の方は、時候の變遷が日本のやふに順序好く、春夏秋冬と云ふ風に、次第に變り逝くのではなくつて、寒むければ一時に酷く寒むくなり、暑くなれば又一時に、酷く暑くな

るさふで、始めて蒙古へ行つた人などは、これがために大變困るさふで御座います。」

「では繁美さんは先づ無事のやふだかね。」

「はい　良人は御蔭で何所とも無いやふで御座ますが何分一人旅だから、淋しくつてならないとか申して居ますが、それでも朝夕の寒さを身に覺へる際は、絹さんが仕て呉れた　毛絲の襯衣やヅボン下などをば澤山に、体軀に着けて出る度に、絹さんの事を思ひ出して、傍に居るやふな心地がするなんつて云つてお越して居りますわホ、、、、。」

「絹!!　モウ澤山だよ、亭主のお惚氣を聞かすなんかは、道理で肩が重くなつたよハハハハ。」

「まあ、お父様つたら、直と交せつ返しなさるわ、良人の話を申上げるとホ、、、、。」

と絹子は颯つと、時ならぬ紅葉を面に散したが、彼が父は眞面目に返つて、

「絹子や、其は然うと、近頃に磯山の老母が、偶然と此の別莊へ見へは仕なかつたらふかね。」

「ねッ……婚家の姑様がですか。」

「左様〳〵。」

「お出に否ね……お出になつたとか下の者が申して居りましたが。」

と絹子は何が故にか、姑が先の日、不意の訪づれ有りしことを、實父の前に曖昧な返辞に紛らせた、けれど太兵衛は態と知らぬ体をして、

「左うか喃、夫では矢張俺が聞き違ねであつたか知ら、でも誰からで有つたか今聢とは覺へないが、一寸那麼噂を耳に仕たから、改て聞て見るのだがな別に何うと云ふことはないがね。」

「夫はお出になつたのは全くですが、妾がッィ野山へ散歩に出かけて、壽子も一所

に連れて出て居ました不在中であつたさうです。」

「左うかい、併し那麼ことは何うでも好いが、前刻一寸顔見せたなりで、壽子が居らぬが何所へ遊びに往つたのかね。」

「多分蓼所の方でせう。」

「左うかねね。」と太兵衛は一寸俛首て、

絹は俺に何事に依らず、能く遠慮を仕過ぎる性質だが、親に遠慮はせぬが好いよ餘り物を遠慮仕たり　或は物を父親には云出しかねて、世間には詰らない病氣を病む娘さん達が澤山あるが、お前は此の廣い世界に、眞の親と名の付くのは、俺より外には無い筈だ、母はあつても爲さぬ中、眞の母が生て居つたら、六十の上を越す年を取つて、お前の上まで心配をせぬが、お前の眞の母親が、先達つて呉れたばかりに、お前と壽子の行末を、父樣は心配をするのだ何も匿すことはない話したい事があるなら云ふが好い、お前も壽子も、眞の母がないだけに、俺は一

倍氣苦勞をする、こんなことは家のお貞の前では云はない事だが喃。」

「お父樣!!!有難う存じます、勘忍して下さい。」

「何を勘忍せるのかね、俺はお前を叱つては居らぬ筈ぢやが。」

「妾は……妾はお父樣のお情け深い御心は、能く存じて居りながら、今のやふな事申まして。」

と絹子は父の前に泣沈んだが、外には秋風徒らに枯葉を卷いて、隣の村の禪寺では かすかに讀經の聲が聞ねて、一つ二つ又一つと摩耶山上の鐘の音が、一室の裡の親子の耳にも、然も哀れに告げ渉る折柄、お兼は赤い花模樣の、硝子火屋の華かな洋燈を持ち運ぶ。太兵衛は其の洋燈を見て、

「お兼や。」

「はい。」

「早や火を點す時分かね。」

「左うで御座ますわ、日が短ふ御座ますから。」

「冬の夜の火だね……。」

「へねッ……。」

とお兼は一寸小首をかたげて、

「旦那樣、何か御用で。……。」

不意の言葉に聞違つたと云ふ風に、お兼が主人に聞き直すと、

「否や、別に用向ではないがね、時候のことがさ、秋とは云へども冬の夜の火だつてねことよ、火の色までが深みりと冴へ切つて居るぢやないか。」

「眞實に左うで御座ますわ。」

と彼は間に合せの返辞をする、其の後の横脇から、乳母のお近が、茶盆など持ちながら、

「旦那樣、甚麼も今度は隨分で御座ますね。」

と顏を突き出す、

「オヽ、乳母やかい、俺は來た時に太郎の姿を見なかつたが、毎日駄々を捏ねて居るかね、乳母も大抵な世話ぢやあるまいと思つて居るのさ。」

「坊樣は御健康ですよ、此の頃は寒いので、お炬燵の周圍でお馬乘が出來て居りますわ最前は能くお寢つて入らしたので御座いましたが、唯今はお眼醒で貴主のお出になつた事を申上ると、坊は父樣に御馬を買つて頂くのだいなどと仰在て一人で騒いで入しやるのですよ。」

「それは却々旺んだね、併し壽子は何を仕て居ますかい、一向此方へは出て來ぬが――――。」

「坊樣のお傍で御座ますわ。」

と云ふ中に絹子は傍から茶を煎れて、

「まあ、お父樣召し上れ。」

と差出す、菓子箱も出る、太兵衛は其の茶を一啜り啜りながら、

「乳母や、俺が久し振りに來たのだ、お兼と二人で何か御馳走を仕たら何うかね。

「それはモウ旦那樣が偶々のお出ですから、何麼御馳走でも致しますが、それを唯今お孃樣と御相談申さうと存じて居りました處なんで。」

「左うかねね。」

太兵衛は應揚に云つて居る、絹子はお近を傍へ呼んで小細聲で、

「乳母や、お父樣は天竹のお料理に限るのよ。」

囁くやふに云て聞かすと、

「全く左うで御座いましたわ、ぢや電話で。」

「左うよ、數は六人前よ。」

「畏りました。」と其所を立つて、

乳母のお近とお兼は勝手へ退る、其の後で太兵衛は、

「絹や、父樣はお前にモウ少し話があるが、序だから話して仕舞う、今夜は此所に寢る譯には行かない、明日午後から築港へ着く外國船があるから。」

「左うで御座いますの……。」

と絹子は一寸襟掻き合せて、更らに父の方に向かひて、優やかに威儀を正して坐り直す、

「話と云ふのは他かの事でもない矢張り磯山に關係の事ぢやが、兎に角先日繁美からの書簡を、一寸此所で俺に見せぬか喃、

「お父樣、彼の手簡はお見せは仕ますが、隨分なことが種々と書いてありますから。」

「俺に見せ悪いと云ふのか、其も或は左うかも知れぬ喃、何分夫婦中の書簡だからそれではモウ其の書簡は見ぬとして最前云つた河内の老母が先日來なつすた際には、甚麼ことで有つたのかい。」

「それはお父様、恁麼話で御座いますの。」
と絹子は先づ涙ぐんで、窃々と語り出す、けれど四邊を憚つてか其の話題の如何なるかは外へは漏れぬ唯時々に一室の裡、
「お父様、お察しなすつて下さいまし。」
と云ふ絹子の聲が泣くやふに漏れて、其の言葉の途切〳〵に、父太兵衛の聲として
「磯山の姑も、頗る不人情な奴である、那麼人物とは俺も今迄知らなかつた。」
と怒氣を含んだやふな聲が、絹子の聲と共に聞ゑた、折りしも外は秋の夜寒むくあはれ一村雨の戸を打つ音はら〳〵と聞ゆるばかり。

(八) 親子の團樂、本邸、旅行の父母

其の夜絹子の父太兵衛は、翌日必らずの商用が有るとの事で、十一時何分かの阪神電車で、皆の者が止るのも聞き入れずに、大阪の本宅に歸つて了つた。絹子は今

し方父を送り出して置いて、漸やく我部屋に這入つたかと思ふと、何を思ひ出したのか、
「お父様、妾は貴父に不孝の娘です。」
と恰かも其所に父太兵衛が居合すかの如く、机の前に泣伏して居る、折柄お兼が壽子を伴れて、
「お嬢様、電車にお乘り遊ばす迄、御見送り仕て遲りました。何うも遲くなりましたわ。」
と二人は部屋の口迄來て云ふ絹子は中から、
「御苦勞で有つたことね。」と對へる聲に、
壽子は入口の襖を開けて、
「姉様、お父様つたらね、妾に電車で一所に大阪へ還らぬか、お前姉様に無理云ふと不可ないから、それでも御影に居りたければ、沈着くして、姉様に無理云はな

いで、能く姉様の仰在ることを聞くのだよ、なんて仰在つたわ、だけども妾姉様に無理少しも云はないわねね。」

「ねゝ、壽様は無理なんて云やしないわ。」

「然うですわね。」

壽子は然も一人の味方を得たかの如く、遂に絹子の部屋へ這入ると、絹子は涙の面を見せる、

「姉さん、貴嬢は何うかなすつたの？。」

「妾　何廢も仕やしないけれど。」

「だつて、姉様の眼に涙が出て居るもの。」

「これは今先、お父様が餘り御親切に仰有つて下さつたものですからよ」

「然う、でも姉様が泣て居なさると、妾何んだか心配しますわ。」

「何も壽さん、心配仕て呉れなくても好いことよ。」

と絹子は手に持ちし半巾で、ソッと涙を拭つたかと思ふと、務めて壽子へ笑顔を見せて、

「壽さん、今夜はモウ更たから臥みませう。」

「ねゝ、妾然うしてよ。」

「ではお兼を呼んでお床を伸させませうね。」

と絹子は立つて入口の所で、

「お兼や、一寸來てお呉れよ。」

呼ぶ聲に應じてお兼は出て來る。

「お嬢様、お呼び遊ばして。」

闕の前に両手を支かねる、

「ねゝ呼びましたわ、御苦勞だがお床をね。」

「畏まりました。」と對ねた。

お兼は其所を引退つて、直ぐその隣りの六疊の押込から、常用の甲斐絹蒲團取り出して、絹子の部屋に姉妹の床を伸べて、

「何麼ぞお臥み遊ばしませ。」

と恭しく云ふ、絹子と豪子は、

「早く伸て呉れたのね、床まで敷かせて濟まないわね、兼堪忍して頂戴よ。」

「あれッ、又お嬢樣つたら、那麼勿体ないお言葉をお掛け下さいますわ。」

「だつて然うよ、同じ女の身であつて、床を敷かせるなんつてのは妾達の吾儘からよ。」

「お嬢樣としたことが、貴嬢樣は御主人で、妾共はお召使の身分ですもの、それ位の御奉公を勤めなくては何うなります。」

お兼は恁麼謙遜して云ふ。そして彼は、

「何卒お臥み遊ばして。」

と閾の所に手を支えて叮嚀に挨拶をした。

「乳母やは何か仕て居るの。」

「坊樣のお添乳を……。」

「ではお前も早くお臥みよ。」

と絹子は優しくお兼に云つた。

「では御免遊ばしませ。」

お兼は己が部屋に退る、其夜は一同寢に就いて、別莊の裡は無事であつたが、其の翌朝から絹子は再び早起を仕出した、

今しも蜜所の掛時計が、午前六時を報じたので、お兼は床を起出て、裏の井戸端に出て見ると、薔薇垣の此方を絹子は逍遙し始めて居る、

「オヤッ、お嬢樣　今朝は又大層お早く。」

「誰かと思つたらお兼か、今朝は妾大層氣分が好くなつてよ。」

「それは結搆で御座いますわ。」

と我が身の如くお兼は嬉ばし氣に絹子へ云ふ、其の中にはお近も起る、亞で壽子も起き出た、急遽に別莊裡は何時にない景氣付て、其所ら邊りが何となく賑はしくなつたやふ、絹子が健康如何に就ては、殆んど別莊裡の盛衰を見るやうで有る。

斯くて其後ち、絹子の病氣も、日を追ふて治る、乳母のお近は太郎を伴れ、お兼は壽子を伴ひて、時折りは絹子迄が彼等の遊び仲間に這入つて、邸内と云はず、野山と云はず、四邊散歩するやふになつた、其の裡には秋の短い日は徒らに經つて、和氣洋々として一ヶ月余りも過た。

今日は其の年の暮れに近い、十一月の廿五日、別莊では絹子を始め、壽子などが大郎を伴れて、住吉の野路傳ひに、停車場附近を散策すべく、侍女のお兼を伴れて、別莊の門の閾を出んとする折柄、大阪の本邸から、店の平藏と云ふ中年男が、主人太兵衛の命を受け、絹子も壽子も迎ひに來た、されど其の如何なる用件であるかは

使の平藏も聞て居らぬ、彼が口上は絹子と壽子両人に、急に父が會いたいと云ふだけのことであつた、で両人は早々歸阪すべく、散歩を止にして其の仕度にと取り掛つた。折柄使の平藏は、

「私周章くつて居て、肝腎旦那樣からお孃樣への御書簡を出す筈なのを、ころりと忘れて居りました、お兼どん一寸之を。」

と平藏は懷を搜つて、一封の書簡を出して侍女のお兼に渡す。

「まあ、平藏どんの周章かたつたらない。」

と云ひつゝ彼は其の書簡を、絹子の部屋に持つて行く、

「お孃樣、旦那樣からお書簡が。」

「あらッ、平藏が來て居るのに可笑いわね。」

「否ね、此の御書簡は平藏どんが、旦那樣からお孃樣へ、お手渡し申すやうにと、命令つて居りながら、周章て出すのを忘れて居たんださうですよ。」

「まあ、平藏の小供みたいに……。」

と絹子は笑ひながら受取つて、鏡臺に向ひながら讀んで見ると、

別飛脚を以て申遣はし候、我れ等夫婦近々の間に、遠方ならねど旅行仕度志望も之有、留守中の事など、申し置度事種々有之候のみならず、他に其許の身に就ても、數々の相談致し度、歸宅の上は例に據つて濱寺の別莊にて暫靜養も仕たければ、今日態々平藏を迎として差し遣し候、來月にも相成れば、最早年末の事なれば家事多忙と相成るべく、さすれば旅行も致兼る事と存じ候。尙又五六日の處別莊の留守居はお近と平藏を止置て差支無之、歸阪の際はお兼のみ召伴れ、壽子と三人にて急ぎ歸宅せられ度候、右口舌の代りまで　早々

十一月廿五日　父　太兵衛より

磯山絹子どのゝ

文意は極く簡短であつたが、其の意味は能く解つて居た、で絹子と壽子は侍女のお兼を伴れて、其の日午後一時過の、阪神電車に登乘して、中の島の本邸に、三人が着いたのは、二時を過る頃であつた。

電車を降ると店の者や、本邸の下婢が軒先まで出迎て、

「お早いお着で御座いました。」

「はあ。」

と絹子は應揚に云ふて、小走りに內へ這入る、其の後から侍女のお兼に本邸の下婢など、

「壽子孃樣も、お早くお還りでしたことね。」

「はあ、お父樣は。」

「お座敷ですよ。」

と本邸の下婢が云ふ、其の中に三人は奥へ這入ると、內玄關の上つた處ゝ、繼母の

お貞も立顯はれて、

「まあ、両人とも早く還られたのね。」

「お母様、漸やく今なのですわ。」

先づ絹子が、すると壽子は、

「お母様、只今……。」

「ホ、、、壽さん、早やかつたのね。」

と繼母は愛想好く頬笑んで、姉妹の娘を導き入れた、一間の裡は父の太兵衛が、待受け顔に、

「姉妹とも早やかつた喃。」

「ねゝ、やう〳〵のことで。」

と姉妹の娘が云ひつゝ坐る

「何れ今日の晩方の事だらうと、今も父様とお話して居た處なの。」

と傍から母は口を添へた、彼是れして居る其の間に、冬の日は暮れ果てゝ、其から親子夫婦四人の團居、遂に其夜更る頃まで、何かの物語に時を移した。頃は天も言はず、地も語らず、前の堂島川に冬の水冷やかに流れて、市街な閑寂、霜銀沙の如く屋上に降る。

(九) 本邸に於ける絹子、良人の消息

其の後絹子も壽子も、五六日と云ふ父母の旅行が、豫定よりは二週日も暇取つたために、止を得ず本邸に起臥を仕て居る。

市内の人は明日が今年の事始だと騒いで居る、其所ら邊の家々も、歳末多忙と云はぬばかりに、何となく人氣立つて、到る處八百屋の店は、赤紙付の塩鮭や、昆布に串柿、さては密柑に橙など、凡てが歳暮祝ひ物の、箱詰やら紙包やら、中には熨斗水引まで取揃ねて、商家の店頭が飾られてある、其の割には之らの品物を買需

める、客足は未だ淋しい、世上の人氣は今年ばかりは、例年よりは不景氣な歳晩で有るとの聲が高い。

其の中にも不景氣は何所かと云つた程に、歐米雜貨直輸入、一手販賣卸問屋、商號奈良屋本店と、ペンキ塗の大看板、英和二種の文字肉太に、書印るしたが屋根に高く、横額のやうに揚げてある、五百井太兵衛本邸の表は、商人の出入頻繁なのと荒荷を積んだ荷馬車とが多く、恰かも織るが如くである、其の間を縫ふが如くに、自轉車の鈴打鳴し、東らか來た電信の配達夫が、奈良屋本店の前に突と降りて、把手を握つたなりに右手を出して、店先の入口から、

「電報!!!。」

「諾い、慥に。」

と上り口に立つて居た、手代らしい男が請取る、

「何所からだい。」

「發信所が横濱で、旦那からだ。」

「では此所ゐ早く出せ。」

こ老番頭の權助が、結界の中から眼鏡越に覗で云ふ、

「でも宛名は宅のお嬢樣だよ。」

「那麼ことはない筈だ。」

「所が嬢樣だから仕方がないよ。」

「チョッ、何の事だい。」

呟いた番頭權助、いま〳〵しさうに、

「ちや、早く奥へ持つて行きなよ。」

「あゝ好いよ。」

と彼の男は電報持つて、中の間の口から、

「お竹どん、ソラお嬢樣へ電報だ。」

と投げ出す、下婢のお竹は其の電報を、

「お孃樣、電報で御座いますわ。」

「然う、何所から？。」

「私存じないのですわ。」

「ホ、、、、では此方へお出しよ。」

と絹子は其の電報を手に取つて、

「あゝ、これはお父樣からだわ。」

「何か急用なので御座いませうかね。」

「さあねね、甚麼用件か知ら。」

絹子と侍女のお兼は顏見合せて云ふうちに、絹子は其所で封を切る。

（電文）

「チヽハハトモイマヨコハマタツタ、アスユウカタ、ハマデラニユク、キヌヒ

サコイ。

絹子は電報を讀了つて、

「お父樣もお母樣も、今横濱出發したとあるは。」

とお兼に云へば、

「では明日はお還りでせうかねね。」

「然うさね、多分明日は……。」

と云ひさして絹子は電報の發信時刻に眼を付た、

「明日には違ひないが　本宅へは還らないで、其の儘濱寺に行くとある。」

「それだけで御座いますの？。」

と侍女のお兼は念を押して聞く、

「それで妾にも、壽さんにも、濱寺の別莊に來いとのことよ。」

「オヤ、まあ。」

呆然たやうに眼を丸くしたお兼は、

「では明日、お嬢様御両人は、濱寺の別荘へお出でになるのでせうかね。」

「まだ思案も定らないけれど何れ行くことになるであらふ、併し春さんは何うするか知ら。」

「多分お出でになるでせうよ。」

「何んとも解らないわ、彼の妹のことだから。」

「でも貴嬢がお出で遊ばせば豈夫」

「其は左うと仕て置いて、店の誰かを呼んでお呉れ今直に。」

「畏りました。」

とお兼は突と店に行つて、

「何誰でも直に奥に迄、お嬢様のお召ですよ。」

此の聲に店の者等は、一同眼を丸くして笑ひ出す、老番頭の權助は、

「何だ騒々しい、静に仕ろッ。」

眼をぎろりとさせて怒鳴る、他の者等は、

「ソラ!!、權助さんの十八番たよ。」

と蔭の方でくす〳〵と笑ふ、其の中に一人が、

「權助さん、奥からお嬢様が御用だとよ。」

「俺にかね。」

云つて權助はまだ立たうともせぬ、すると又、

「然うよ、權助さんにお嬢様がだ。」

と隅の方から誰とも知れず云ふ聲がする、此の時權助は突つと立つて、

「何ッ、馬鹿を云ふない。」

呟きもつて老番頭の權助は奥に行つて、絹子が居間の閾の處より両手を支ねて、

「嬢様、何かお召遊ばして。」

「あゝ、お前でなくても宜かつたのよ。」
「ですが御用は？。」
「今電報を父様からお越しなすつたわ、明日は濱寺の方へ歸ると仰有つて。」
「ぢや、他に店への御用はないので。」
「はあ、其の他には何も……。」
「それだけの用で御座いましたの。」
「ホゝゝ。」
と絹子は笑ふ、老番頭の權助は苦り切つて、
「ねゝッ、又若い奴らに擔がれた。」
呟きながら又店に行く、それと引違へる樣に、侍女のお兼が、
「お孃樣!!!。」
と忙々として來たかと思ふと、

「只今磯山樣の御隱居樣が、お玄關に見へて居りますが何う致しませう。」
「姑母樣が？。」
「否ね。」
「舅父樣の方が？。」
「然うで御座いますわ。」
「妾が出るからお前は彼方のお座敷をね。」
「宜しう御座います。」
と侍女のお兼は其所を退つた後、絹子は一寸襟掻合せて、
「壽さんもお出でよ。」
「姉さん何所ね行きますの？」。
「河内のお舅父さんのお迎へするのに。」
姉妹は直に玄關に行つたが、絹子は先づ、

「まあ、舅父様、能く入らつして。」
「お叔父さん、能く入らしてね。」
と愛想好く迎へる、磯山の老人は
「おゝ、絹さんか、壽さんもだね。」
「さあ、何卒、お通り下さいまし。」
「では御邪魔を仕ても好いかね。」
「差支はありませんは。」
「御両親は不在ださふなが。」
「然うで御座いますわ、折角のお出に両親とも居りませんので、併し明日は濱寺へ指して還るさうで、只今電報が來ました處で。」
「それは何よりぢや。」
「まあ兎に角、お上り遊ばしませな。」

「では然うさせて貰うかね。」
「ねゝ、何卒ぞ。」
と絹子は舅父を客間へ導く、本邸の客間は六疊の小間ではあるが、珍奇珍品の裝飾は却々立派で、磯山家とは趣きが違ふ、絹子は先づ舅父に一別の禮を述て
「舅父様、何からお話しませうか知ら。」
と口を切るので、
「俺も餘り御不沙汰をして居るのと、絹さんの病氣も訪ねたし、繁美から云つて越した事もあるので、是非一度出やう〳〵と思ひながらに、年を老るとつい〳〵御不沙汰勝になつてね。」
「否ね、左樣はかりではありませんわ、妾も一度河内へ還つて、お両所の御機嫌を伺ひませうと思ひながら、其の内にはと日を過ごして、失禮ばかし仕て居ります
の。」

云ふ中にお兼は澁茶などを運び出す、

「お越し遊ばしませ。」

とお兼は一寸挨拶が濟むと、

「一つ召上つて。」

香の良い煎茶を出して、

「お嬢樣、此所に置ます。」

と絹子の前にも同じやうに茶を差し出すそして、彼れは退つて行く、後は主客又兩人、

「御両親は遠方へかの。」

「はい、東京地方まで。」

「それは誠に良いことが出來たの。」

「お談中では御座いますが、良人が何か愛古から申して參つたやうな前刻のお話で

したが、惡いことでは有ませんか。」

「然ればの事ぢや。」

と老人の言葉は沈着て居るので、絹子は尙は心配さうに、良人の身を思ふばかりで

はなかつた、それに繫る吾身の上も思ひ遣るので、

「甚麼ことなのでせうかね。」

と眉を寄せての話の聞き振り、舅父は更に、

「然うだ〳〵、ッイ此の間の事であつた、繁美が送つた書簡の劈頭に、絹さんのこ

とを細まゞと云ふてあつた。」

「妾の事が……。」

「定めて心配を仕て居るだらふてなことや、靜枝と房と、絹さんの折合は何うだな

どゝ、矢張り繁美も心配して訪づねて居るよ。」

「で御座いますか。」

と絹子は少し愁眉を開ひて、

「でも何でせうかね、良人は近頃健康で勤て居られるのでせうか。」

「それはモウ絹さん心配は無用だがね、困つたことが一つ有るのぢや。」

「全体何で御座いますの？。」

と絹子の白き富士の額は、又急遽に曇りを帶びた、

いや、其の話は……。」

と老人は云ひさして何故にか口を噤んで、

「俺は恁麼思ひますのぢや、磯山の家族が、繁美と絹さんと俺の他に、誰も居らねば好いがと……。」

と彼と絹子の話の順序は、此の塲一寸他の物語に反らせて了つた。

（十）濱寺の別莊裡、絹子の煩悶

絹子の父母は横濱より電報した翌日の午後、濱寺の別莊に歸着した。旅行以前に比べては、歸着後の父母は頗る健康の人となつた。

絹子は前日から此の事を聞て居たので、壽子を伴れて其翌日の午前中に、無論濱寺の別莊へ出かけた。

逢へば親子の常として、話題は種々に持出された、父母の歸る一日前、磯山の老人が中の島の本邸を訪づれたことや、繁美からの消息など、話はそれから夫にと遷り、五百井家近頃にない團樂を盡した。

父母は旅行の土産物など、絹子と壽子の前に出して快く與へた、それに引き續ひて御影の別莊に乳母と居る、長男太郎の話までが持出された、其の間には父母等が両人への土産物に就いての說明、或ひは名所古址の話まで、事落ちもなく聞かされた、

其の談話の途切た間には、磯山家との關係やら、絹子の良人繁美の身の上話も持ち

出した、當時繁美と絹子との間に、面白からぬ蟠りが、外部から生じて居る事やら、さては前日御影の別莊へ、磯山の姑房子が不意に來訪したことや、中の島の公園で、絹子の乳母で在つた人に、偶然の邂逅したことやらなど、絹子は此の時始て父母の、慈悲深き心に告げた。

此の時父母等は絹子の意中を、始て知り且つ病性までも知つたのである、夫に就ては父の太兵衛は、絹子の事を一方ならず、苦心に苦心の種を作つた、ではあるが此の事の端緒だけは太兵衛は、薄々と其當時から、瀬更知らぬ譯でもなかつた雖然斯く迄事實が復雜して居て、而かも姑の房なる者が、吾が兒の靜枝に肩を持つて、絹子と繁美の夫婦間を、徒らに苦めつゝ有るものとは露ほども知らなかつた其れが爲めに是れ迄は、絹子が意中有りの儘に、父の太兵衛に打明かす機會がなかつた、

それで此の話を絹子の口から、太兵衛が始めて知つた以來、磯山の刀自房子と、

其の娘の靜枝なる者の上に就ては、渺なからず立腹をした、結果は絹子を磯山家より、引取るべく話を持ち出した、されど之は両家直接の問答ではない、最初絹子を磯山家に、繁美の妻として嫁がすべく周旋した、媒酌人の内田勘藏へ迄の内談であつたが、遂に太兵衛は決心して、繁美と絹子の間柄を、將に破境せしめんとする迄に、局面の話を進行せしめた。

されど此の際、両家の親双方の間に、此の悲むべき問題が、持ち上つて居る事は遠き蒙古の未開の地で淋しい生活と青英の任を帶びて、故郷の山懷い絹子の俤を、幾夜冷い寢醒にも、暖い昔に絹子を携へて、過し家庭に在つた事を、偲ぶ繁美は何事も知らぬ。

夫に引換へ五に井家へ、絹子が磯山から離縁と聞いては、改めて伜の嫁に申請度なぞゝ云つて、渺なからず希望者もあつた、其所へ太兵衛も立腹の折柄なれば、或は絹子を離婚せば、何某の請ひに應じせしめやうかとも思ふ心は時々に、絹子の心

にも其れと知られ、或時は父の太兵衛自ら絹子を一間に麾き、

絹子や、俺は決して望むと云ふ譯でもなく、又物好で云ふのではないがね、繁美さんと離別て了つては何うだい、彼の樣な惡徒の姑や小姑があつては、お前と繁美の夫婦中が、到抵末長く睦うは行かないよ、女として節操を改めさすことは、父としては忍び得ないが、元々言へば俺ばかり云ひ出した事でもない、お前も繁美さんとは家同志の交際から知り合つた中で嫁つた事だし、だが夫は有つて過た事、今となつては云ふさへ愚痴だ。」

「では有りませふが……お父樣。」

「何かね。」

「他の事でも有りません、能く世間で申して居ります、破境の嘆とか云ふ事は、隨分他にもないでは有りませぬけれど、それは皆當人同志の上に於て、互に心を解し損なつて居たとか、或は一時其の一方に、意外の欠點を認られましたとか、尠くとも意志の綜合を缺ひて居たとか云ふやうな場合にあることで、妾等の夫婦の間柄は、當人同志は少しの支障もないのみか、互に愛し、愛されつゝ有りますのに、強ひて別れる事とすれば、自ら破境の嘆を招ひて、一生互に不幸の境遇に沈むのではないのでせうか。」

「さあねね、夫は左樣かも知れぬがね、併しながら、廣い世界に娘の兒を持つた親は、可愛娘を嫁に遣つて、當人同志の仲は甚麼でも、娘が姑のために苦られて居るとか、虐待をされて居るとか云ふやふな事を見ては、一寸の間も其麼家に何うして可愛娘を遣つて置けるものか唷　嬶てお前達も兒を產めば、其の可愛さは一つのものぢや。」

「それはモウお父樣の仰有る通り、兒の可愛さに二つは無いと存じますわ、ですけれども。」

「ですけれども……それぢや何んだね、俺の言ふことは道理には叶つて居ても、繁

美とは離婚ともないと云ふのか喃。」

「全く然うでも。」

「ぢや、離婚ても云いと云ふのかい。」

「否ね、それもねね……。」

「では、何う仕やうと云ふのかね。」

「妾は猶旦、今暫此の儘で……。」

「此の問題を解決させないで置けと云ふのか。」

「はい、何うぞ今暫の所は……。」

「ではあらふがお絹や、お前もモウ兒供ぢやなし、御亭主を持つた年になつて、我身の上に降りかゝる末の難儀を、現在に味はひながら、年老つたお父さんばかりに、氣ばかり揉ませて居るやふぢや、此所に居る靜子と一つぢやが喃。」

「夫は然うかも知れませんわ。」

「さ、夫れだから不可ない、何も心配することはないよ、お前の後には此の父が付て居るぢや、大船に乘つた氣で居るが好い、ではあるが今のやうな、兒供らしい事は云ふまいぞ、何の搗ふことはない、繁美さんのことは思ひ切つた方が好いよ。」

「ですけれど、只今の處は。」

「何うでも待てと云ふのかね。」

「はい、明年の五月には、良八も一度歸朝を許されるさうですから、其の際能く話をして、其の上で又甚麼にでも纏めを付ますから、其迄の所を今の態で置いて下さいましな。」

「ハハハ、來年の事云ふと鬼が笑ふとの俚諺があるが、猶旦お前は癡兒だよ。」

「其の癡兒で今暫の處をねね、これは妾のお願ひですから。」

「お前にも困るぢやないかね。」

と父の太兵衛は莫の煙を、パつと一吸吹出して、

「絹子や。」

「はい。」

「此の話も話ぢやけれど、お前が今の樣にお云ひだから、今日は一寸中止して置くとして、當分の間壽子と共に、本邸の方に居て呉れるだらうね。」

「それは妾何うとも致しますけれど、壽さんは何う申ますか知らっ」

「それなら幸ひ壽子も此所に居るぢやないかね。相談して見るが好いよっ」

と太兵衛は云ひながら、妹の壽子を見て、

「縣子や。」

「はい。」

「お前今お父樣が姉さんへ、云ふて居た事聞たぢやらうが、姉さんと二人で本邸に居るかい。」

「ねゝ、姉さんさね居なすつたら妾何時までも居てよ。」

「ぢや然うするが好いね。」

「ねゝ、妾然う仕ますわ、だけど。」

と壽子は一寸思案して、姉の絹子へ。

「姉さん然うなさるの？。」

「お父樣の仰だから然う仕ますわ。」

「ぢや妾も然うしてよ。」

「壽さんは何んでも姉さんの尻付するのね。」

「あら、酷いわ、妾姉さん尻付しやしないわ。」

と壽子は姉に揄揶れて、可愛頬をポッと膨らす。父は其の顏を見て、

「オヤ〳〵、壽子が御立腹の体だね。」

「お父樣、妾何も怒ちや居や仕ませんわ。」

「でもお前、今頃ベッた飴王のやうにしたぢやないかね、ぢやあれは何んだいハハハ。」

「あれは、あれはお父様ホホ、、、、、。」

「あれは、あれはお父様ホホ、、、、、、かね。」

「ホホホ、知りません。」

と壽子は愛くるしく絹子の膝に凭れついて、拗たやうな顔をしながら、

「姉さん、妾は。」

と云ひながら眼を擦るので、絹子は一寸俛首れて見ながら、

「あらッ、壽さん何泣いて居るの、今のはお父様の御串談だよホ、、、。」

「だつて妾。」

「何うなのか。」

「お父様つたら、彼様顔をして云ひなさるから怖くてよ。」

「御串談だから怖かないよ。」

「然うでせうかね。」

「然うとも。」

「眞實かと思つてよ。」

と云ふ横腦から父の太兵衛は、

「絹子も寢兒だが、壽子は又寢兒だあハハハハ。」

大聲を出して太兵衛は笑ふた　折柄繼母のお貞が其所へ、次ぎの間から現はれて出た。

（十一）汽車中の遭難、權助の西下。

路行く人は顏見合して、明治四十一年の十二月も、茲三日で又來る年の、春を迎へるやうになつたと、互に語り合ふやうになつた、人心の忙しない頃である。

濱寺の別莊裡では、五百井家の主人夫婦、兒供故の辛勞も、身代から割出した世間の人前、滿更の事も出來ず、千尋に思は碎くものゝ、これぱかりは親夫婦の、思ふ樣にも決しかねた、其の中に押詰つて、歳晩と成つて見れば、商用やう何やらで絹子の事も一時沙汰止み、越年の準備と貸金の勘定に、太兵衛は眼の廻るほどの忙しさで、毎日本店支店の番頭等より、凡べての報告を聞き取るだけに、一寸の暇もない。

絹子は本邸で壽子と二人、父太兵衛からの用件を、店の者等へ傳へながら、父に代つて内外の事など、取扱ひつゝ有る中に、遂に新年を迎へるやうになつた。

斯くて別莊から父母も歸り、五百井家主從共に、目出度新年の賀儀も濟み、注連の中も經つて了い、彼れ是れする中一月も暮れて、早ら如月の紀元節も過ぎ、世は三月の花見近き頃にもなつた。

絹子の父太兵衛は一日、店の手代平藏を伴れて、保養がてらの商用を兼て、神戸

姫路、岡山、尾の道、廣島、馬關と取引を濟ませ、本年中に於ける商業の計畫も立つて、外國との取引も、略ぼ前年の豫算通り、目論見も着た頃、今日は日和も暖いから、一番の急行列車で、歸阪すべく馬關の旅館を、午前六時何分に立つて、土地の停車場に來て見ると、列車は今や發車の眞際で、恰かも五分鈴を改札所で驛夫の一人が振り鳴して居る最中であつた。

主從兩人は手早く切符を買需め、改札もそこ〳〵、プラットに走り出るや否なやに、緩急車から六番目のボギ式、二等車の中へ乘込んだ。

主人の太兵衛は先づ腰を掛けて、前と兩脇の同乘者を眺めながら。

「平藏!!!、乘つたか。」

と自分の右を不意と向ひた、

「はい、漸くに乘りました。」

と平藏は吐息して居る、すると又

「平藏!!!。」と主人の呼聲耳を打つ、

「はい。」

「恰度好い所であつた喃、モウ四五分遲れて居たなら、此の列車に乘り損う所ぢやに喃。」

「全くで御座いますね。」

「好い都合に乘り込んだものだ、物事何に據らず斯う云ふ塩梅に、程能く行くと氣持が好いね。」

「そりやモウ貴主、御意の如く、萬事を斯う都合好く仕たいもの、ですが兎角物事は、百事萬事と手違に成りたがるものですが、今日は一番旦那の御蔭で、ヘマを踏ないで濟みましたよ。」

と平藏は主人の意に叶ふやうに、其の塲体裁好く相槌を打つた、主人の太兵衛は頷づひて、

「然うだ、全く貴樣の云ふ通りだよ、何が何んでも停車塲で、列車に乘り遲れたほどへヽは無いね、お負けに多くの人中と來て居るからサ。」

「其りや貴主、云ふまでもないのですが、既に今も停車塲で、私の隣に立つて居た人などは、一寸切符を買ひ損つたそれ故に、客車の入口まで進んで居つて、モウ乘つちや危險と、車掌の野郎に注意をされて後すざり、遂に此の列車を恨めしさうに、馬鹿が鐵砲喰つたやふに、ボンやり仕て居たぢや有りませんか、今旦那が仰有つた、本文通奴さんは一分の相違なく適りましたよ。」

「然うだつたけ、ソイつは一番見物であつた、貴樣は却々觀察が早い、だが併し氣の毒だね。」

「そりや然うで御座いますよ、奴さん私共の、何も仇ぢや有りませんから、考へて見ると氣の毒でさ、併し此の後は九時過なけりや、急行はないのでね、ホイ早や一驛來ましたよ。」

「然うだ、此の驛は幡生だ。」

「廣島へは何時頃着ませうかね、旦那樣。」

「然うさね、この列車が八時五十分の下の關發だから、廣島へ着は午時後二時四十七分とか云ふよ。」

と主人の太兵衛は時間表を出して見せたすると、平藏は其の時間表を手早く一寸打眺めて、主人の方へ返しながら、

「旦那樣、全体廣島と云ふ市街は、田舍には似合ない好い土地のやふですね。」

「だが人氣の極惡るい所だ。呆然仕て居ちや大阪の商人なんかは廣島商人には得て仕てやられる、それこそ油斷が出來ないと思へ。」

「ですがね、ぢや國が下劣なだけに人氣が狡猾と云やうなものですかね。」

「早く云へば那麼ものだね。」

「ですが旦那、商人の金融は相當に出來る所ですかい、何麼ものですかね。」

「平藏は妙なことを聞き出すが、何か將來に廣島の商人と腕くらべでも行る積りかい。」

「何も那麼譯ぢや有りませんが、商人の手代としては心得事で御座いますから。」

「其の邊は大に爲になることがあるね、其の土地その土地の商人根性を研究仕て置くことはね。」

「私は何時も旦那のお供をして、恁麼取引に出た際は、此の話を旦那樣から云つて聞せて貰ふのが、唯一の樂みに仕て居るのですよ。」

「ウム、那麼譯で聞いて居るのか、却々感心な思ひ付きぢや、何んでもまあ確手とやれ。」

「へゐ、有難う御座いますよ。」

兩人の話は斯う云ふ風に、それからそれへと枝葉が咲て、世間話やら何やらで。

次の驛の一の宮、長府、と云順序に、次第に列車は東に進む。

折柄前を列車ボーイが、千鳥足に過て行くのを、彼方の角に陣取つて居る籠者らしい丸顔の美人が、

「あの一寸。」

と呼止て、

「廣島へは何時頃着きますの。」

と黄色いやうな癇張つた聲で問ふた、

「二時過には着きますが、その廣島はモウ此の次の其の次の驛ですよ。」

「あゝ、ぢやモウ來ましたのね。」

「然うです、先づ着たやふなものですな。」

「甚麼も有難う……。」

「御安い御用ですよ。」

と云ひ殘してボーイは次の車内へ這入つた、その話で此方の五百井太兵衛と手代の

平藏は、

「旦那樣、モウ廣島だと云つて居ますよ。」

「那麼風だが何時か知ら。」

と主人の太兵衛帶の間より時計を出して、眉を顰めて一寸見ながら、

「然うだ、モウ廣島へ來る時間だ。」

「ぢやモウ二時過ぎですかね。」

「今が恰度二時が一分過た處だよ。」

「モウ、歸りに廣島の永島商店はお寄りなさらないのですかね。」

「然うだね、寄たつて駄奴だらうよ。」

などと商業上の話をして、両人は車窓を眺めた時、列車は正に廣島構内に入つた。

けれど列車が最大急行であるだけに、五分の停車で此の驛も發した。

両人は朝馬關の旅館で、御土産の印迄にと、二包貰つた折詰の鮓を、主人の太兵

衛が先づ膝の上に出して、小瓶ではあるが正宗二本と、自分と平藏との間に置きながら、

「平藏!!!。大分腹が空つたやふだ、一寸之を今の間に喰ないか。」

と云へば平藏向き直つて、

「何うも結搆で御座いますね、ぢや早速頂戴致しませう。」

「然うさ、喰るのも好いが一寸待つた、寒さ忘れにこれ一本茶の代用だ。」

と主人はその正宗を平藏に遣る、

「おうや〳〵、私までも戴きますの、そいつは何うも有難いことで。」

「宅では恁う酒までも、他の者の手前呑せられない、だが今日は汽車の中だ、氣兼をせずと呑むが好い、其の中には一驛〳〵大阪に近くなるよ。」

と太兵衛は平藏と恁う云つて、彼の折詰を開きし頃は、海田市の驛に、今や列車が着く折しも、廣島行下り列車と、端なく大衝突の異變があつた。

汽鑵車は双方共に粉碎された、車輛は殘らず脱線して、乘客の中には死傷者も出來た、それで前部の車掌と火夫の二人が、眞先に卽死をした。

此の變災に海田市驛より、驛員は勿論醫者警官などが現場に出張して來た、其の中に死傷者の調査も濟んで、臨時負傷者救濟所も、海田市の寺院を宛て、人夫に據りて送くられし、負傷者の人員中、五百井太兵衛と平藏も、其の負傷者の一員であつた、

太兵衛と平藏は救濟所に送られてから、早速自宅へ電報を送つた、併し彼は他の負傷者に比較しては、極めて輕傷の方であつたが、之は不幸中の僥倖とでも云ふのであらふ。

其の日電報の五百井家に到着したのは、恰度其の夜九時過であつた。

此の事變の報を聞くと、五百井家では家族の驚きは云ふまでもなかつた、種々協議の結果老番頭の權助が、取敢ず海田市へ急行すべく、主婦のお眞から命を受けて

是も又其の夜の一時何分、梅田驛を出發した。

其の後両三日を經つてから、主從三人打連れて、漸く大阪に還へつたものゝ主人の太兵衛はこれが爲に、他の病症を併發して、尠からず病床に伸吟した、其の上遂に持醫の勸で、暫く家政を見ることを止て、再び濱寺の別莊裡に、妻のお眞と行くことゝなつた、

これと同時に絹子の体軀も、暫く本邸を父の代りに守るべき事とゝなつた。

斯くて一月余も經つて、世は春の半ば頃、太兵衛の病氣も稍や回復し、少しは家族一同が、愁眉を開きかけた折柄、絹子の緣談一件に就て、相談が有るとの事にて濱寺の別莊へ、壽子も同伴來いとの旨を、絹子の許へ父太兵衛から、事細まゝと通知があつた。

此の際父から絹子へ來た、手簡の或る一節は、尠からず絹子の心を、亂れた麻のそれよりも酷く、殆んど絹子が卒倒する程、情緒を亂し煩悶の度を增さしめた事が

ある、

それは他でもない磯山繁美と絹子との間を、斷然離婚と云ふ事にして、それと同時に或る一方へ、機を定めて再婚さすべく、凡ての事情が認めてあつた。

此の時の絹子の決心と煩悶とは、如何に苦痛を感じたであらうか、可憐絹子は此の後に於て、如何に悲慘な境遇に立つたかは、或ひは讀者の想像以外に有るであらうと著者は信ずる。

（十二）濱寺公園、別莊の夜話

白沙青松の裡に仄見へる濱寺の別莊に、五百井家の令孃が姉妹。父の病を訪れがてら用件をかねての逗留が、恰度來てから六日目の晩、二階の障子繰り開て、春の夜の朧月を眺めながら、姉妹の窃〳〵と談す聲が頻りにする。

「姉さん、磯山の兄さんは、近頃何故來なくなつたの、御病氣ぢやなくつて？」

「おほゝゝ、何故那麼ことを聞くの。」

と先づ姉は氣訝な面付、

「別に譯はないのですけれどおほゝ。」

「然う。」

と互に無邪氣笑つたが、姉は何だか氣の冴へぬやう、直ぐと口を噤んで俛首れて了つた。無心の妹は姉の方を見詰ながら、

「私、磯山の兄さん大好きよ。」

「まあ何故に？。」

「面白い快濶なお人だからよほほゝ。」

「たゞ一度お目にかゝつただけだのに。」

と頬笑みせし姉は、芳齡は二十一か二位、鼻筋が彫刻のやふで、色の白い眉の奇麗な、見るほどに美しいのであるが、二重瞼の黑い瞳が潤勝で、頬の邊少し面窶れ

がして、束髮の後れ毛二筋三筋、殊更に今宵は物思はし氣な風情である。さりとて彼は病氣と云ふほどでもない。

屏風に劃然と火影を描いて、びつたりと寄添つた妹は、まだ愛くるしい十二三、丸顏の脹りとした頰に、人懷い大きい靨を堪ねて、体軀を少し斜に、右手は折鶴を持つたまゝ膝の上、左手は花鳥の摸樣美しい、友染の被布の袖に入れて、凝乎と姉を見上た、肝然とした眼元は、白酒の醉ほんのりと、絹に包んだ紅薔薇の色をして居る。

「壽さん、隆子さんは甚麼なすつたんでせうね、知らなくつて？」

「お父さんとお話して居てよ。」

「さう。」

と姉は何だか思當るやうな顏をして。

「お母樣も居らしつたの。」

「ねゝ、初はお母さんは居なかつたのよ。私傍で遊んで居たでせう、そしたらね清水谷の姉さんもお父さんも何だか泣いて居たの、姉さん貴女をね、無理にやるのはお父さんも憂いつて言つてゐらしたのよ、それからお母さんが入らして、何か仰在るとねね、お父さんが大變お怒りなすつたわ、私恐ろしかつたから逃げて來たのよ。」

「お母さんが甚麼こと仰在つたの？。」

「私よく聞かなかつたけれど、姉さんが强情だからつて言つてらつしやつたわ。」

姉は手巾を咥へたまゝ默つて了つた、妹も所在なささうに、手にした折鶴を凝乎と瞰めて、口を噤んだ、折柄次間に人の來る氣はい、

「絹子さん、此所に居らつして？。」

突然に聲をかけて襖を啓けたのは、眼元の冴々しい、髪の豐かな、十八九の女である、

「まあ、壽さんも、酷いわね、妾甚麼に搜したでせふ。」

と笑ひながら這入ると、その後から飼猫の三毛までが隨て這入る。

「さう、甚麼も失禮。」

と姉は甲斐絹の布團を脩めた　隆子は一寸會釋して座についたが、不圖絹子の横眼を見て、

「まあ奇麗ですことね、貴女の？。」

と手文庫の上を眺めて、プラチナの寫眞に目をつけた、そして又妹の方を見て莞爾と頬笑んだ、

「姉さん、三毛も來てよ。」

「可愛いことね、壽さんの？。」

「いね、姉さんともお仲間なの。」

「まあ、さう――――。」

と客は怪訝な顔するのを、壽子は見ぬ振りをしながらに、三毛猫の頭を撫ると、ゴル〳〵と咽喉を鳴らす、客が少し此方へ寄つて座を進めたのを見て、

「隆さん、妾這麼事でもして氣を紛はしたくなりましたわ。」

と絹子は聲を潤ませた。

「無理はありませんわ。」

隆子は同情の深い眼をして、

「眞實にお察し申しますよ。」

「有難う、那麼に仰在つて下さるのは、隆子さん貴女はつかりですよ、妾死んでも忘れませんわ。」

と云つた後は、絹子はぢつと眼を拭つた　隆子も同情の涙に眼を潤しながら、

「それで貴女は何時頃三崎さんとかへ入らつしやるのですか。」

「先方の御都合にも依りますけれど、何れ來週の火曜日頃になりませう……が

併し。」

と絹子は一寸言ひ淀みながら、一層叉切なさうに、

「隆子さん、妾何故恁うなんでせうね、お父樣は八釜敷仰在るが、何だか三崎へ再緣ことだけはね、寧そ此の儘、何所までも恁うして居たいのよ。」

「さうでせうとも、今度貴女が行つてお終まひなすつたなら、妾淋びしくなりますわね。」

「あら隆子さん、淋しいなんてそれぢや妾は何麼しますの？。」

「……。」

隆子はハッと返辭に窮した、實に結婚と云ふことは、人生の必要ではあるけれど、世間のため壓迫を受け、心にも無い結婚を、望む人より望まれた人は、餘儀なくさせられる結婚で、戀人を捨て同胞を置き、而かも意中の人物は、遠き未開の蒙古の地に在つて、淋しい旅の夢結びつ、故郷の事は知る由もなく、雨に風に甚麼に淋し

いことであらうと思ふ絹子の身を思ひやると、隆子は我身のやうに憂くなつた、沒して絹子が此の度の決心は、人にこそ語らぬなか〳〵に、深い〳〵事情がある

絹子の母は恰度十年前の春であつた、彼が十一の壽子が三つと云ふ時、苟の風邪が原因となつて、遂に他界の人となつて終つた、一年經つて今の繼母が來たのであるが、絹子の優しい氣立に、最初の頃は極く平和な美しい家庭であつたけれど、根が浮氣家業であつたのに、二年目に不圖今の太郎が生れてからは、一は世に云ふ爲さぬ仲の、意味あるやうな小言を口にするやうになつて、一寸何うかすると二言目には、

「絹さんはお怜悧だからよ、」

てな事を振り廻はすやうになつたのであるが、不幸は之に止まらなかつた、夜半に枕の紙を濡らすと云ふ、悲しい憂い世の中にも、尙ほ一點彼女を慰めた、思も遠き三千里の、ケルレン河の畔に通はせた、良人と云ふ戀しい面影が偲ばれてあつたが

果敢い人生に大きな望を抱たまゝ、あつたら異國の土と化して了つたとのこと、嘘か眞かは知らないが、或る新聞の電報欄に記るされてあつたとの事、現在の父から聞かされての後に、此の度の再結婚談が持上り、絹子は餘儀なく決心をすること、なつた、

「姉さんが嫁つてお終ひなすつたら、私が一番滿らないわ。」

と壽子は被布の房を撫でながら云つた。

「壽さん!!!。」

絹子は遽に妹を引寄せて、

堪忍して下さい、妾は決して、決して嫁きたくはないんですけれど、嫁かなきやならない譯があるんですから、あゝ壽さんがせめて十五にお成りだつたら、妾の心もお分りでせうけれどね——。」

と云ひ淀んだが隆子に向ひ、

「隆子さん、女と云ふものは何故恁うなんでせふ。」
と呟くやうに云つて溜息を漏した、
「ほゝゝ、妾また愚痴なことばつかり云つて、御免なさいよ。」
絹子は勉めて笑つて見せたがまた、
「隆子さん、眞實に壽さんの事をお願ひ申します、嘸ぞ苦勞をすることなんでせう
から、壽さんも隆子さんを、これからは姉さんだと思つて居らつしやいよ、ねゝ
解つたでせう。
「ゝゝ、私さう思つてゝよ。」
壽子は愛くるしく返辞をした、
「嫁つて了いなすつたら、何時頃またお目にかゝれるでせう?。」
「隆子さん妾――――」
と絹子は涙を落して泣いた、

「はあ、何?。」
「でもお手紙は下さるんでせうねゝ。」
「ゝゝ、貴女も何うぞ。」
と隆子が云ふと、
「姉さん、私も上げてよ。」
壽子も涙の眼を見張つて云つた、
「ゝゝ、何うぞ。」
と絹子は輕い返辞をしたが、遽に妹を抱き締て、
「壽さん　あなたは、あなたは妾を忘れるんぢやありませんよ。」
と話は此所に一寸霽きて、三人は相抱いて心行くまで泣いた。
此の時四邊は寂莫として夜は徒らに更け逝く、時折南海線を通ふ夜行列車の響き
のみ、夜の濱寺の寂莫を破る、折柄二階の上り口に、

「絹子!!!、誰方もまだ御寢みでなくつて？。」

と凛とした繼母お眞の聲、三人は口を噤んで、暫時物語りは途切れて了つた。

斯くて絹子は机の上の、置時計に眼を着けた、

「隆子さん、早や十二時過ましたわ。」

「では皆さん　モウ寢ませて頂戴ね。」

と隆子は莞爾として云つた、

「搆いませんわ。」

「だけどねね、又明日もあるわ。」

と隆子は云ふ、

「では隆さんも壽さんも、寢みませうか。」

「姉さん、好いことよ。」

茲に三人は寢に就た、絹子も壽子も久し振りに、友と語り戯して樂しく明かした、

その翌朝、

意外、絹子の寢床は藻抜、空、枕邊に殘る一封は、父へ宛てたる遺書のみ、淋しさうに空床を守つて居たのは昨宵隆子に隨て上りし手飼の三毛猫、今しも眠なから醒めて四足を踏み、背を高く伸して欠伸一つ。

（十三）絹子の家出、生死の不明

波音靜に風清く、月落松林を漏る濱寺の、五百井家の別莊、軒端を照す宵の月はいつしか消て、朝の旭影を射こむ。

庭の梅ヶ枝に鶯の餌を漁る聲騷しく、階下では主人の太兵衛夫婦が疾く起き出て笑ひ聲、

昨宵泊りし二階の客清水谷の隆子嬢に、絹子が妹の壽子と両人、これも漸く夢醒めて、互に嬉々と笑ひ聲が、階下に傳ふる折柄隆子は、

「壽さん、能く寢んだのねね。」
と先づ口を恁う開く、
「ねゝ、然うよ、併し貴女わ。」
「妾も能く寢んだわ、あれから全く一息よ。」
と昨宵の寢着を繰り返して、隆子は淡泊に云つた、
「あら姐さんも然う私もだわ。」
「好かつたことねね――――。」
「姐さん　私は何時も能く寢るの、だから姉さんやお父さんや、お母さんまでが妾を寢兒だと云ふのだわ、ほゝ。」
ほゝゝ、壽さんは那麼に能く寢なさるの。」
「ねゝ、全くなのよ、ほゝゝ。」
と寢醒の兩人は心地好氣に、語りもすれば語られもする、仲睦じい間柄、

「姉さんはまだ眼が醒なくつくか。」
「……。」
と壽子は姉の絹子を指した、けれど其の姉は返辭がないので、隆子はこれを引き取つて、
「絹子さんも能く寢てるわねね。」
と相槌を打つ、それを壽子は
「だけれど姉さんはねね、何時もお眼醒は一番なのだわ。」
「それでは今朝だけ、絹さんが尾けだね。」
「はゝ、姉さんは尾だだとよ。」
「でも一番絹さんが遲ひのだもの。」
「可笑わねね、ほゝゝゝ。」
と壽子は可愛く笑つて見せた、

「では壽さん、モウ起きませうか。」
「ねゝ、姐さんも起きてか。」
「はあ、モウ起きまわ。」
「では私も然うしてよ。」
「好いわねね——。」
と両人は起きて戸を繰り開けた、されど絹子は臥床から、姿を見せぬばかりではない、更に枕した影さへもない、両人は始て氣付しと見へて、絹子の臥床近く寄つて見る、
「あら、姉さん早起き出てよ。」
と壽子は隆子を振り返へる、
「では絹子さんが矢張り早いわ。」
「左樣だわねね——。」

と両人は惶急たやふにして、下座敷へ降りて行くと、絹子の姿は認めないが、火鉢の前に母のお貞が、居坐つて居て、両人を見ると、
「まあ、早いのねね——。」
と莞爾として口をかけた、
「伯母さんモッ早いことはないわ、妾澤山寢惚してゝよほゝゝゝゝ。」
客（）隆子は極り惡る氣に返辭をすると、
「お母さん、宅の姉さんは？。」
と壽子が問ふた、
「宅の姉さんはつてほゝゝ、壽さん可笑こと云ふ兒だよ、一室で寐んで居りながら……。」
「だつて姉さんは起きて居て、寐床の中には居やしないのだもの。」
「そんな馬鹿なこと、有るもんですか。」

「だつて然うよ、姉さん寐床に居やしないのよ。」
「壽さん眞實なの？。」
「ねゝ、吃度よ、私お母さんにちやッぼこ云はないことよ。」
と壽子は少し眞面目になる、
伯母さん、壽さんの云ふのは眞實なのよ。」
と隆子も横間から口を添へた、
「でも、絹さんは今朝はまだ、一度も下へ降りて來ないのだもの。」
とお貞は凜として言ひ切つた、
「では不思議だわ。」
「何が？。」
「何がつて絹子さんの居ないのがさ。」
「隆さんも壽さんも笑談でせふ。」

「否ね、伯母さん眞實ですよ。」
と隆子は更に念を押した、
「ぢや壽さんの云ふこと眞實なの。」
「ねゝ、お母さん吃度〳〵よ。」
「まあ――――。」
とお貞は始て驚いた風で、突と其所を立つて、奥の間に居る良人太兵衛に、
「ねね、所天や。大變なことだわ。」
と云ひつゝ良人の前に坐つた　太兵衛はぢロリと妻を見返り、
「騷々しい何んだい大變なことゝは。」
「絹さんが居ないのですわ。」
「はゝゝゝ、大變だなんて何かと思つたら、馬鹿々々しい、絹子が何所へ行くものかね。」

「所天、は、所ぢや有りませんわ。」
「ぢや何と申上るのかね。」
「笑談ぢや有りませんよ。」
「では畏るとせう。」
「所天では、まだ那麼こと云つて。」
「ではモウ何も云はないで置くさ。」
「所天、那麼笑談を云つて居らずと、眞面目に聞いて下さいな、お願ひですわ。」
お貞は良人に恁う泣かぬばかりに云つた、すると太兵衛は、
「そりやお前、今其所で、隆さんと壽子が寢そぶれに云つてたことぢやらう。」
「ね、だけど夫れが眞實なので、妾も最初は嘘か笑談だと思つて居たのですがね
壽子も隆子さん迄が眞面目になつて云ふのですもの。」
「そりやまあ然うだが、實地お前が絹子の寢床へ、まだ行つて見たのぢやないのだ

らう。」
「ね、ですけれども兩人がまさか。」
「全く揄揶つて居るのだよう。」
「でも事によりけりだわ。」
「ぢや其程お前がか思ひなら、論より証據だ、早く二階へ上つて御覽よ。」
「なるほど然うでしたねね。」
「それ御覽なさい、だから婦人は。」
と太兵衛は尙ほも泰然として、少しも驚く色をば見せない、お貞は止むを得ず、
「では一度念の爲めに上つて見ますわ。」
「それが捷路。」
「でわね——。」
とお貞は直ぐと二階へ上つた、

「絹さん、絹さんつたら。」

「……。」

呼べど更に返辞がない、お貞は更に

「絹子!!!、絹子つたら、お巫座戯でないよ。」

「……。」

と云つて見たが以前と同樣、絹子に似た返辞さへ、誰も答へるものは居らぬ。

「あれッ、變だこと。」

とお貞は絹子の寢床近く進み寄つて、つくづくと眺めたが矢張り居らぬ、で彼れは遂に上の蒲團を跳返して見た、すると中から、甘つたるい聲をして、

「にやゐ――。」

と飼猫が出るので、お貞は少し腹たゞしげに、

「お前だないよ、嫌な猫つたら。」

とお貞は立腹の餘り罪の無い猫までを叱る、此所に愈々、お貞は不審の眉をひそめて、二階の內外、押込の中など、心當りは隈なく搜した、けれども絹子の姿なるものは、何所に行きしか影もない。

お貞は少し落膽の体で、今や階下に降りやうとして、不圖向ふの間を見ると、机の上の昨宵の洋燈に、まだ幽かに火が點つて居るのに心付て、それを吹き消すべく後へ還つて、何心なく机の上に眼を注ぐと、絹子の手跡で認めた、手紙樣のものがある、お貞は之を手に取り上げて裏表ともに眺めて見ると、

限りなき懷しの

不孝の娘

絹子

御父上樣

母上樣　御兩所に

遺書

斯くの如く筆跡鮮かに一封の遺書を發見した、お貞は驚いて轉ぶが如く、其の遺書を手にしながら、良人の傍に再び降り來て、ぶる〳〵と身を震はして、

「所天!!!、矢張り眞實で御座いますよ。」

「ねッ。」

「これを一寸早く御覽遊ばせな。」

と例の手紙を差し示す、太兵衛は少し不審さうに、

「あゝ、これは絹子の遺書だ。」

「それ御覽なさいな、妾があれほど申しましても、所天は笑談のやうに仰在つたが……。」

「俺もまさかに絹子が、恁麼ことを仕出かすなんかは、夢にも思つて居ないもの。」

と云ふ折柄、姪の隆子と娘の壽子は、化粧室から奥の間に來て、此の事を聞くや否や、兩人は早や涙ぐむ、太兵衛夫婦は驚きの余り、手の付方も無き儘に、一先本邸に電話して、窃に老番頭の權助を呼んだ。

（十四）高津の夕、乳母の家

さなきだに花見頃の東より西、北より南と、浮かれ狂ふ四月の三日は、神武天皇の當日で、社會諸有階級の人が、花に狂ふ蝶のそれに、恰も似たる心地せる日の暮れ近き頃、宛然人車織るが如き道頓堀の、二ッ井戸の角を東へ、突き當つた交番の横を、足早く通り抜けて、尚ほ東に走り行く痩形の美人、身にはさのみ飾らねど、堅縞お召の袷を着て、其の上には同じ樣な縞の羽織　髪は洗ひ揚た束髪に、質素な色のリボンをあしらい、空氣雪駄を穿きたるが一人、右手は懐に差し入れたるも左手に小さき風呂敷包は、菓子箱の一個も包みたるほどのを持つて、兎角打ち沈んだ風の下見勝に歩み行く、姿は今屠所に引るゝ小羊のそれに似たる、見るからが可憐さふな美人である。

彼は行方の路に立つ、人毎へ氣の毒さふに、高津の裏門へは何所かと、教を請ふ所を見れば、水の都の大阪の人と見受られぬ、さりとて彼が風体と、化粧の仕方から推測すれば、他國の人でもないらしい、蓋し彼の美人なる者は、察する處產れは東で、今は此の大阪に、永年の住居をせる、去る大家の令夫人とも見へるのである。

彼は高津裏門下の、本家黑燒屋の角を少し、北に曲つた迎ある家の、門先に立てる婦人を見て、

「一寸物を伺ひますが。」

と叮嚀に聲をかけたが、其所に立つて居た四十格好の肥つた老婦人は、

「へゐ、何だつか。」

と準大阪式言葉で云つた、すると彼の美人は、奥床しい微笑して、

「誠につかない事をお尋しますが、此所は高津の裏門下と云ふのでせうか。」

「さよ〳〵、高津の裏門下は此所だすわ。」

「ではモウ一つ伺ひますが、此の邊に行重お露さんつて方は御座いませんでせうか」

と老婦人の横顏を見詰めて居る、

「さあー、お露さんと云ふのは此の向ふに有りますけれど、苗字は何と云ひますかな……。」

「然うで御座いますの、甚麽も有難う。」

「へゐ、滅相な、向うの家でまあ一度訪ふて見なはれ、さうかも知れまへんだすさかへつ」

と老婦人は更に、石階の前の所を指差して、

「あの向に　乳母車の置いて在る隣の家だすわ。」

と大阪には珍らしい、是は又親切な指示方、

「甚麽もねゐ、御邪魔をしまして、では其所を一度伺つて見ませう、御免遊ばして

と彼の美人は何所迄も、優美高尚な性質に見へる、それで彼は直ぐと其の指示られた家の表に突と立つて、暫く標札に眼を着けて居たが、忽ち何か思ひ出したかのやう、小頷きをして、

「然う〳〵、百八番とか云つてたが此所だわ。」

と先づ獨言を小聲で云つて、眼を右ッ側の柱に注ぎ返へすと、小さな木標に女の手跡で筆細に、行重露と描いてあるので、つか〳〵と入口に倚つて、

「御免なさいよ。」

と云ふ聲と共に先づ入口の、格子戸を少し開けて、内裏の樣子を窺ひながら、遂に這入つて、

「行重お露さんと仰在るのは……。」

皆迄云ふて仕まはぬ前に、彼方の襖の蔭の方から、つか〳〵と飛出たのは、これも五十格向の婦人が、

「はい、お露は手前で。」

と云ひつゝ庭の美人を見て、

「おゝやまあ、甚麽もお珍しい

「乳母や、御免なさいよ。」

「お嬢樣、兎に角まあ御通り遊ばして。」

「ねゝ、有難う。」

「何も御遠慮は入りませんよ。」

好い所だわねね。」

「否ね、何も好い所でも有りませんが、何分妾一人暮しで居りますのでねね。」

「結構だわ、氣樂で。」

「何も氣樂でも有りませんが、何うか斯うか日送りを仕て居るんですよお嬢さん。

「それが好くつてよ。」

「ですがお孃樣、穢しい所なんですが、まあ一度は此所へ迄御上り下さいな、御急ぎですの。」

「那麽譯でも有りませんわ。」

「ぢやまあ何うぞ、此所へ迄……。」

とお露は美人を無理やりのやうに、勉めて奥の間に導ひた、座敷は強ひて廣くもないが、六疊の小間ながら、却〳〵掃除は行き屆いて居て奇麗である、次の間には日中は針子が少し來ると見へて、針箱の十四五も、片脇の方に積んである主婦のお露は茶器などを持運んで、其所に座はり、

「お孃さん、御緩つくりなさいまし。」

「はあ、有難う。」

「今日は何か此の邊へ、貴女は御用でも有りなされましてのお出でせうね。」

「否ね、全く然うでもなくつてよ。」

「では道頓堀のお芝居へでもか。」

「ほゝ、那麽ことなら氣樂だけれど。」

「ぢや然うでも仰在らないの？。」

「ねゝ、然うよ。」

「では全体何所へ入らしつたの。」

「乳母やの宅へ態〳〵相談に。」

「ねッ、それは孃さん眞實のことですの。」

「眞實の事ですわ。」

「それはまあ甚麽事だか存じませんが、御相談とありますれば、妾しの力に及ぶだけは、何なりとも、御相談に乘りますよ。」

「でも妾、あんまり物があつかましいわねね、たつた一度、始て中の島で逢つた位で。」

「那麼御遠慮は入りませんわ、貴女は始てと仰在るけれど妾しは貴女へ乳を上げたものですから昨日や今日の御方とは思ひませんわ。」

「左う云つて貰ふと妾何だか、心持が丈夫になつたやうに思つてよ。」

「左う思つて頂ひてこそ、妾も嬉しふ御座いますわ、併し今日貴女御一人で？。」

「全く一人つぼしで來たんだわ。」

「お供もなく御用心の惡るい事つたら。」

「ですが妾　モウこれからは全くの一人ものになつたのよ、寧そ死んで終まはふかと思つた位であつたけれど、それもあんまりだと思つてねゝ」

と云つて美人は眼を潤ませて、縮緬友染の袖口をちらと出して、ソッと涙を拭ぐふのを見て、

「まあ――お孃樣、夫れは何を仰在りますか。」

とお露は頗る驚た樣子で、

「甚麼なことか知りませんが、死の生るのつて縁喜でもない、モウ〳〵那麼お心は淡泊とお止遊ばしませ、恁なことが有らうかと思つて妾は、遙る〳〵東京三界から、此の大阪に流れ來て、今の今迄蔭ながら、貴女のことを片時も、忘れたことはないのですよ。申せば長いお話ですが、元貴女の御家と云ふのは、東京の牛込區で、新小川町に立派なお宅が在りまして、手代番頭の四五十人も、一時に御奉公仕た商家で「東京では隨分と人に知られた、舊家で在つて、先代の旦那樣が、貴女のお母樣を只今の旦那樣と、御配遇になつたのですが、恰ど貴女が御出來なすつた翌々年の秋、先代の旦那は御亡成り遊ばしてから、引續き商賣上の大損をして、遂に此の大阪へ御引越に成りましたが、今の中の島の御本宅です、それから今の旦那樣と、貴女のお母樣とが一生懸命に御勉强遊ばして、間もなく立派な御身代と御成りなさると、今の貿易商を御始になつて、御先祖の出生が大和の奈良で有るとの事から、屋號も改て今の通り奈良屋と御付遊ばしたのです、其の

頃妾は東京から、夫婦連れでお供をして來たものです。所が其後只今の奥様が、元北の新地の何とか申ましたつけ、有名なお青樓の藝妓であつて、其の色香に貴女のお父さんが、一時御迷ひ遊ばした節、貴女の眞のお母様は、旦那の不身持を御心配なすつて遂には重い御病氣となられ、御亡れなすつたと云ふやうな譯で、妾ら夫婦が貴女の御宅へ、御出入を止めました行き札は、今の奥様が御輿入れになつたのが元で、第一には貴女のお母様と申のすは、五百井家先代から家付の娘旦那様は御養子の御身分にも拘らず、あまり我が儘を遊ばすので、妾の良人か御意見申した事もありましたが、それを只今の奥様が、何の彼のと妾等夫婦の、さんざんつぱら惡口仰在つてから、妾の良人も短氣ものでしたから、三度諫めて聞かざれば去るべし」とか云ふ古人の敎も有るとか申して、遂に御出入を此方から御斷申上たと云ふやうな譯なんで　實は今日迄も伺はなかつた次第ですが、妾は前奥様の御遺言も承つて居つたので、死んだ良人とも相談の上で、蔭ながら

貴女と養子嬢様の、御身の上を氣遣つて居たのですよ、所が先日中の島へ、妾が敎へて居る針子を連れて、散歩の折り柄、貴女のお姿を見受たので　針子は先へ還へして置いて、若しやと思ひながら御尋したのが、猶旦貴女で居らしたので、彼の時の嬉しさと云つたらそれこそ眞實に、妾は我が子に逢ふたより嬉しかつたのですよ、だから今の樣な滿らない事考へて、御心配なぞ決して〳〵遊ばすな、貴女御姉妹の身にかゝる事なら、妾は命かけてゞも御世話申しますよ。」

と乳母のお露は事落もなく、一射千里の勢を以て、一息、二息を亞ぐ中に、孃々と辨じ立てた傍に正しく最前より、此の話を聞き取つた美人こそ、これ余人ならず絹子で有るので、此の話の途切れるのを待つて、絹子は先づ、

「乳母や、堪忍してお呉れ、那麼親切な乳母やを持ながら、妾は少しも知らないで今迄他人にして置たのは、全く濟まなかつたが、それとも知らず今日訪ねて、始て知つた双方の身の成り行き、妾は何んと云ふ不幸な女なのでせうかね。」

と云ふ聲さへも千切〳〵に、絹子は其所へ泣き伏したが、乳母のお露も貰ひ泣きして、不圖氣が付て四邊を見ると、日は暮れ果てゝ軒端の月が、淸く一と間を照らして居るので、お露は一寸其所を立つて、洋燈に火を點しながら。

「お孃さん、妾しばかり話して居て、火を點すのも夕飯を差上げるのも、全く忘れて居りました、兎も角然う云ふ御都合なら、今晩は妾方で、お嫌でもお泊りになつては何うでせう、緩〳〵御話を承りますやうにしますがねー。」

「では左うさせて頂戴よ。」

「併しお宅の御都合がそれでも甚麼ものでせう。」

「モウ妾は家に、再び還らぬ積りですわ。」

「ねッ、お孃樣、それは又何故にですか。」

とお露は云ひさして絹子の顏を見守つた、其の両眼には熱い涙が、頰を傳ふて瀧の如く、両人は暫時泣き沈んたのであつた。

(十五) 新聞紙の記事絹子の驚

奈良屋の本店では、老番頭の權助始め、丁稚小僧に至るまで、絹子が不意に家出した報知があつてからと云ふものは、上を下への大混雜、親戚と名の付く所は云ふまでもない、心當りの家々は、一々人を馳し問合せて見た、されど更に其の消息は、査として知ることは出來ぬばかりか、絹子の出た其の日からは、既に一週日の上を越すも、未だ其の消息の端緒だに知ることが出來ぬ。

絹子の身は磯山家に嫁してから、未だ送籍の手續こそ濟んで居ないが、全然磯山繁美其人の、百年を誓ふた妻である、今は其の良人が不在中で、其れが爲に磯山の家庭に、近頃忌はしい問題が持ち上つて有るので殆んど實家に身を置き勝となつて居るも、未だ離婚になつたと云ふ、事實は全く遂ばれて居らぬ、であるから磯山家へも、絹子の家出した次第を、報知さない譯にも行かない、さりとてこれを磯山家

へ、有の儘に通知すれば、五百井家の恥辱となる、と云ふ議論も親戚間に、餘程多かつたと云ふ事で、止を得ず一時磯山家へは　絹子の家出を秘密に附した、

斯くて恁な評定に、日一日と過去つて、今は早や一ヶ月の、上を十日も過た頃となつた　今更ら新聞に廣告して、絹子の所在を捜す譯にも行かない、と云つて何時までも、此の儘に抛つて置く譯にも行かないと云協議の結果、遂に所轄警察署迄、保護願のみ差出さしめた、すると其の翌日の朝、絹子の家出は何々の理由に依つて生じたものだなど、嘘と實の出鱈目記事が土地の諸新聞紙で報道された、之れが爲に此の事件の一部事實は、遺感なく發表されて、當人は云ふ迄もなく、五百井家も磯山家も　多少は世の笑種となつた、これが抑〳〵五百井家の、世間に信用を失ふ大原因となつたのである。

其の當時此の出來事を、報道した新聞の中には、而かも一號題字の下に、所々貳號活字や三號を配置して左の如き記事が提唱された、これが一時これら新聞紙中の

三面雜報として、最とも讀者の好奇心を喚起せしめたとは、五百井家の番頭權助が話。

●五百井家令孃の家出

▲原因は離婚問題の衝突▲姑の奸計▲娘の實父母重婚を强ゆ▲可憐の絹子よ▲誣辱されし良人の磯山大に怒

聞く說近頃名家深窓に育つ、令孃夫人などの上に淫風旺んに行はれ、聞くも忌はしき事のみ多きが其の中に、これも又其の一つとかや、時は是れ四五日以前、市内北區中の島五丁目、五百井家の令孃絹子が、一日濱寺の別莊に在りて、其の夜遂に何れにか出奔し、後にて繼母貞子の手から、發見されたる遺書の一節は、讀むものをして同情の念禁ずる能はざらしむると同時に、吾人轉た寒心に堪へざるものあり、今其の一節を左に紹介して、世の父兄達の子女敎育の上に於て、大に鑑みる所あらしめんとす。

（前畧）妾は世の人達の如く、自分の戀なるものに憧れて、其の意志を貫かんがために、限りなき大恩を受けし、父母様の御意を背くにはあらざれど、吾身は一度天縁有つて、磯山繁美の妻として嫁ぎし身が、姑のため、小姑のために、奸計をめぐらされ、女としての誣辱至らざるなきまでに受け、而かも良人の不在中、實家に歸臥するの止なきに至らしめ、剩さへ遠き異國の蒙古の地に、青英の業に從ひつゝある、良人の心まで蹂躙され、廣い世界に杖柱とも頼みにする、良人への通信は、両家の親のために遮られ、而かも第二の力と頼める、お父様の御心は、磯山繁美と離婚して、今一度節を改め、他に再縁すべく様の御訓しも有りたれど、斯ることは女の身をして、最も悲むべき事なれば妾は強ひて父上の説を排斥す、されどかくしては、我意を立て通す強女と、父母共に御立腹もありたると聞く、されば吾が身は最早此の世に生存すべきものにあらずと決心して、斯く家出致したるも、決して

御なげき下されまじく、されど父母掬育の御高恩は、死後に至るも相忘れ申さゞれば、不幸の罪は御許し下されたく、斯くして我が身の上相果し上からは良人へ申分も相立、當初互こ誓ひ契りし言の葉の次第にも相愜ひ、また相柔らざる互に愛の限りかと存じ候儘、一筆書のこしたゝ、此の上いろ〳〵書殘し度こと山〳〵おはし候へど、涙出て胸苦く眼暗らみて筆運ばれず候、先日父母より御話しの如く、我良人繁美様最早急病を以て彼の地に御生存これなきとのことの、新聞紙の記事、誠なれば致方これなき次第なるも萬一何かの間違にて、千に一つも我良人の此世に殘り居られ候様の事ありたる節は、何卒此の由御話の上、妾が心の程御傳へ下され度こればかり氣がゝりの儘相果て申べく候云々。（下畧）

以上の長き書置の文意は、極めて悲絶慘絶なるものなるが、彼れ絹子は自己の戀のために、身を犧牲に供したるものとは斷定すべからず、彼は彼自身を

擁護するの餘り、彼が其清きこと玉の如く、其潔白なる事雪の其く、其固きこと鐵石の如く、其の良人に對する情緒高尚にして、而かも奥床しく、一絲亂れざる節操の優美は、最後に彼が良人への手向の料として、苟も良人を辱しめず、彼が敵となれる舅姑を怨まず、両親に事へて不孝ならざらんことを思ひたる結果、遂に自己の一命を犧牲に供したるものと認めんか、これ吾人の謬見なるやも未だ以て知るべからずと雖も議論はさて置き、兎に角斯る可憐の淑女をして、而かも悲絶惨絶なる一大突飛の活劇を演せしめ、永く彼が涙恨を竹帛に垂れさせるが如き動機に導かしめたるは、是れ豈何人の罪に歸せんか、吾人其歸着に就ては、焉んぞ明言する能はずと雖も、此の出來事の内容と彼れが美はしき書置に據れば、要するにこれ、少くとも五百井磯山の両家庭の罪に歸せずんばあるべからす　（以下次號）

怎麼新聞紙の記事が日々連載されたために、絹子は斯る新聞紙を、或る所で拾讀み

して、尠なからず驚いたが、或る日の夕暮れ、乳母の隱れ家に歸つてから、其新聞紙を再び取り出し讀んで見ると、自分の家出は事實なるも、書置に至つては、自分の書いた實際とは天地の相違で、斯る馬鹿なものではなかつた、と云ふことを今乳母のお露に話すべく、椽端の所に出て、病みて痩せたる体軀を柱に、初夏の夜の月を眺めがち、細ま〳〵と物語つて居る、

「ねゝ乳母や、新聞なんて怎な嘘を書き立てるものでせうか。」

と先づ問ふやうに云ふと、

「でも、何んぼ何んだつて、そんな嘘ばつかりを、如何に新聞だからと云つて書かないでせうよ。」

「然うだらうねゝ。」

「では取消とかなすつちや何うでせうね。」

「だけど其の取消を仕て見なさい、それこそ妾の此所に居ることが知れるやうにな

るわ。」

「それも、然うで御座いますよ。」

「だがね、妾此の新聞紙のこと記事から、色〳〵物を考へると、何うも此の新聞が誰れからか金でも貰つて、書たんではあるまいかと思ふ所が澤山なことあるわ。」

「眞實に然うでありましたら、貴女は何うなさいますか。」

と乳母のお露は横合から、恁ふ一寸問ふやうに云ふ、

「其れはまあ其の事實が解つてからでないとね、妾は何とも考へが付かないが、若しも其の樣な事が知れたら、妾が何んぼ女だからと云つたつて、却々承知が出ぬるものかね。」

「そりや、然うでせうね、其の時は妾が先に立つて其の事を書した奴を、お孃樣と妾の前に呼んで來ましてさ、ウンと油を取つてやつた上でね、さんざんつぱら謬らせて、その上で警察か何所かへ、妾が何うかへィ宜しくと、連れ出てやります

さ、實眞に惡い奴ですよ。」

とお露は今其所にでも、其の者が居るやうに、力瘤を入れて云ふので、

ほゝゝゝ、乳母やつたら、まあ一寸お待よ、那麼に今怒つたつて、その徒らを仕た者は、何所にも居やしないんだからね。」

「まあ、ほんに然うですねほゝゝ、妾モウ何んでも此の通りに、貴女の事となりますと、然う思つて居りながら、恁なに力が入りますよ、オヤツお茶のこぼれてるさへ知らずに居りましたわほゝゝゝ。」

お露は絹子に氣付られて、初めて夢から醒た人の如くに笑つたが折柄表口の外からドら聲を出して、

「郵便!!。」

と呼ぶのでお露が出て見る、

「行重さんつてのは此所ですか。」

「然うですよ、妾が行重お露なんで。」
「ぢや、一寸聞きますがね、五百井絹子さん……。」
と云ふのをお露は聞き取り、皆なまで云はせず、
「へゝ　それは宅ですが五百井ぢやなくつて、行重お絹ぢやありませんか。」
と云つて郵便夫の顏を見て居る、
「あゝ左うだ〳〵、五百井は消して横つべりへ書き直してある行重絹子と。」
「ぢや、やつぱり宅ですよ」
と郵便夫は行つて了つた。お露は受け取つた其の封書を、今しも奥へ持つて來て、
「お孃樣へお手紙ですよ。」
「あれッ、何所から？。」
「妾ちは解りませんよ、皆んな横文字ばかりで書いてあるんですもの。」
「おや、誰からだらう。」

と云ひつゝお露の手より受け取つて見ると、
「まあ——　乳母や!!!　この手紙は……。」
「その手紙、何うですの？。」
「この手紙は妾が兼て話して居る、例のお方からのお手紙だわ。」
と嬉しさうに絹子が云ふので乳母のお露は、絹子の背をぽんと一つ輕く叩ひて、
「お孃さん!!!」
「ゐゝッ吃驚りしたわ。」
「お嬉びなさいよ。」
と云ふ時高津神社の松ケ枝に、杜鵑高く裂帛の聲二つ。

（十六）大學病院、絹子の病室

絹子が高津の畔に乳母と同居してから、月を閲すること茲に二月余。

此の頃より絹子は不圖風邪の氣味で寢に就たが、病症頗る穩かならずとあつて、大阪に於ける持醫は京都に、轉地療養すべきやう、お露の許まで云ひ薦めた。

其の時絹子は時折り、紅き痰を吐やふになつた、病名は云ふまでもなく肺結核である。

病氣が隨分危險な症なだけにお露も尠なからず心配をした、が此の際に於ける絹子の決心は、假令死すとも病氣のために、實家に所在を知らせるやうな、滿らぬ事は仕て呉れなと、お露には呉れ〳〵も賴んだ。

であるから其の心根を、お露は深く同情して、自ら絹子の看病旁〳〵、京都に轉地して、絹子を大學病院に入れた。

絹子の病室は二等室の、二階の上つた突き當りから五番目の、甲の第十二室であつた。

東山の花は散りて、青葉がくれに杜鵑の聲きくも、此所四五日と云ふ五月の差入

三日の朝大阪を發して京都へ着たのは、恰度其日の午前十時　十五分を過た頃で、晴快なる好天氣であつた。

七條の停車場を出て其の前から、電車の東廻りに乘つて三條通りの、迎ある旅人宿く一先落着た。それから或る人の紹介を以て大學病院に行つて、診察を受けると入院せよとの事であつた。

病症はまだ初期であるから、慥かに全治の見込あるとの主治醫よりの說明を聞いた、これでお露も當人も少しは心が安まつた。

お露は凡て此の準備をする間も、絹子の身を大阪の知り人に、發見されない樣に注意して居た、無論此の時大學病院では、五白井絹子とは名乘らせなかつた、行重お絹と云つて居た、これは凡て乳母お露の計であつた。

絹子は此の病院に這入つてから五日目、お露を枕許に呼寄せて、

「乳母や、妾ねね。」

「はい。」
「全く病氣は癒るでせう？。」
「ほゝゝゝ、お孃さんつたら。」
「でも、乳母やは何うお思ひだね。」
「貴女は心配仕過なさるから駄奴ですは。」
「病氣が？。」
「然うぢやないので。」
「では何が？。」
「貴女の旦那樣のことを……。」
「だつて妾、此の節は勉て思はないやうにして居るのだわ。」
「それがお宜しいのですよ。」
「何故に？。」

「それは妾、恁思ふのですわまあ能く物を御考遊ばせや、世上では誰も申します如く、人は命あつての物種と申しませうが、だから幾ら樂みな事が有ましても、病氣で居ちや駄奴ですから、何より彼より其の病氣を治す方が肝腎だと思ひますわ。」
「それは全くの事ねね。」
「ですからさ貴女も當分の內は、少しの間旦那のことをお忘れなすつて、まあ緩り御養生遊ばしませ、其の中には妾しが、貴女の旦那樣を連れて來てあげますから。」
「それはモウやう承知して居るのだわ。」
「では何故今のやうな事、仰在のですの。」
「他ぢやないのよ、妾は昨夜、妙な惡るい夢を見ましたもの。」
「ほゝ、夢なんか的になりますものかね。」

「でもそれを心配するわ。」
「ぢや其の夢が貴女の御病氣に、癒る癒らないと云ふ關係が有りますのか。」
「と云ふ譯ぢやないけれど。」
「では好いぢや有りませんか。」
「でもねね。」
「でもねねと仰在るのは、矢張り然うなんでせう。」
「否ね。」
「ぢやお孃樣、さつぱりと事が分らないぢやありませんか。」
「否ね、妾はねね、昨夜の夢が惡るいと云ふのは、恁ふなのよ、まあ聞てお呉れ。」
と絹子は乳母の顏を見て云ふ。
「ねゝ、承りますとも。」
「ではねね、恁うなのよ、旦那樣が妾の傍へお出になつて、絹子!!、絹子!!とお呼

び遊ばしたかと思ふとねね、大變嫌さうなお顏をなすつて、お前は俺の不在中に實家から飛出るなんかは、女としては大膽過た仕方であるが、其れがお前は俺のためだと思つて仕たことかは知らないが、反つてそれが新聞なんか書れて、結果俺らの不名譽となつたばかりでなく、兩親達の顏汚しになつたぢやないか、だから、假令お前が今の病氣が治た所で、再びお前を俺の妻に持つことは出來ない第一世間が許さないからつて、大層御立腹遊ばした末、俺はモウ宅へ歸るから然う思つて呉れと仰在るの、それで妾は泣いて居たが、不圖思ふと旦那樣は、まだ蒙古からは歸朝なさらない筈だのにと思つて上を向くと、何だか電氣にでも觸れたやうな心地がして、あれッと思つた拍子に眼が醒めて見ると、ピッたり体軀に汗を出して居て全く夢ではあつたけれど、何だかそれが妾は頗る氣になつて居るのだわ。」
「おや〳〵、そんなことが何んの的になるものですか、今に旦那樣が御歸朝遊ばし

て、此の話をお聞きなすつたら、何を抛つて置いたつて、一番に孃樣をお尋になりますわ。」

「眞實に然うなるだらうか。」

「全くなりますよ。」

「ぢや嬉しいことねね。」

「ですから、貴女も大切に御綏りと、氣を長く持つて御養生なさいよ。」

「有難う、妾眞實に然うなつたならば、何れ程喜ぶか知れないわねね。」

「然うで御座いますとも。」

とお露が絹子の樣子を見ながら、卓の上の藥瓶を取つて、

「お孃さん、お藥一度召上れ。」

「はあ、有り難う。」

「有難うぢや有りませんよ。直ぐ召しませな。」

「貰ひますよ。」

と絹子は手を出すので、お露はその藥を飲ませ、

「お孃さん。」

「はゝ。」

「何か他にお思召の品物はありませんか。」

「はゝ、妾その夏密柑一つ欲しくつてよ。」

「宜しふ御ざいますよ、直ぐ皮を剝て上ますわ。」

とお露はその夏密柑の皮を剝取つて、それを絹子へ手渡し仕た折り、

「ゴホン〳〵。」

とお絹が咳きし痰の色、その紅きこと椿の花の、ポトリ〳〵樹から落たそれの如く乳母のお露は、

「それ御覽遊ばせ、最前のやうな事仰在るから、恁麼ものが又出ましたよ。」

と痰壺を與へて吐かしめたが、彼はそれを其の儘又、消毒室の中に入れて、再び絹子の傍へ來ると、

「乳母や、氣の毒だわねね。」

「お孃樣つたら、那麼御心配入りませんは。」

「でも恁麼世話まで乳母やにさせて。」

「何んの貴女、これ位の事が。」

「でも然うよ。」

「否ね、何時でしたかも申上げた通り、妾は貴女の事や壽子樣の事に就ては、命も惜かありませんわ。」

「乳母やは好く云つて呉れるねね。」

「否ね、妾實際ですよ。」

「だから妾は樂〻と嬉しくなるわ。」

「まあ、貴女然うでも思つて、御心を長く、御養生遊ばして、お早く御全快遊ばしたら、妾がお供して旦那を御訪ねを致しますわ。」

「妾それを樂みに待つて居るのよ。」

「その時は妾は孃樣からと、旦那樣からと、色〻喜んで戴きますのが、何よりの樂みだと心得て居りますわ。」

「それ程にまで妾らを思つて呉れてね。」

「然うで御座いますわ。」

と両人は恁う話しをして、互に不圖顏を見合した折柄である、東山は華頂の峯に幽かに告ぐるは、知恩院の梵鐘が、夜半を報ずる音響洛の内外に渉りて淋しく此の時両人は、

「あゝ、嫌な鐘の響たこと。」

と絹子が云へば、お露も又同じ樣に、

「全く嫌な鐘の音ですねえ。」

と云ひ終つて両人は其の夜の眠りに就いた。

その翌朝の十時頃、大學病院の各病室では、今朝の明け方、南禪寺の疏水の中へ、投身せし婦人があつたとの噂があつた、其の婦人はまだ年の若い、大阪生れである との事が病院内の話柄に上つた。

（十七）番頭權助、濱寺へ急行す。

其年の五月九日、奈良屋本店の老番頭權助が、朝間の主用を終つて、今しも結界の中に這入つて、其當日の大阪新聞を讀む中に、左の如き事實を登載せる記事を認めた、

●美人の溺死者發見　昨朝午前四時頃の事なりとか、京都市東山南禪寺畔疏水下流の堀溜に於て、年頃二十一二と覺しき頗る付の美人一人、溺死し居

たるを、其の附近工事中の土方風の男が通行の際、之れを發見したれば、直に最寄巡査派出所に屆出たり、檢視の上死体引取人なきを以つて、直に市役所に引渡され、制規の如く假埋葬に附したるが、聞く所に據れば、同美人は檢視の際、右の手には鈍金の指輪二個までも箝め居たり、又頭髮は束髮にして銀製の花輪形ピンを以て、薄き紫色のリボンを挿し、身には縞お召の袷を着たるが、肉付の痩たる所より察すれば病後の人らしくして、一見何所かの令夫人らしく、されど何れの者とも何等住所の取調上端緒と思ふべき所持品は一もこれなく、幽かに手がゝりとも見るべき品は、死者が衣類の袂に持ち居た薄色半巾の端に赤インキを以て、羅馬字にて、オサカ、ニッポン、ケナラヤ、とペンの跡美くしく記され有るのみなるが、檢視官は死者の多分大阪の者なる事を推定するに難からずとなし、專ら同地方の人々に就て取り糺したるも、未だ何れの誰れなるやを知るに由なく、必當りの者は、同地市役

所に就き申出すべしとの事なり。（京都電話）

權助はこの記事を讀んで、百雷の一時に落たる如くに慄ひて、其の新聞紙を手に持つた儘、次に坐つて居た番頭の平藏を見返つて、

「平ぞん!!!。」

「權助さん何だい、突然に吃驚したよ。」

「吃驚も何もない、大變だ〳〵。」

「オヤ〳〵、何が大變だね。」

「何がつてお前、たゝ大變なことだよ。」

「分らねゑなあ。」

「何が分らねゑのだい。」

「お前さんのやうにさ、譯を話さないで、一人でただ大變だ〳〵と云つたつて、何の事だかさつぱりと始末が付かないよ。」

「ソ、其の譯は分つて居るぢや無いか、コ、恁な新聞の記事が出て居るのだ。」

「そりやまあ、お前さんは讀みなすつたから、能く承知だらうけれども、私達は未だ今朝からは新聞なんか一寸も讀まないんだから。」

「ぢや、此の記事を一寸讀んで見な。」

と權助はその新聞紙の記事を指先で示して、平藏と云ふ男へ見せた。

「なるほど、これぢや權助さんの驚くのも當然だ、私でも驚きました。」

「然うだらう、驚かずにや居られまい。」

「ですが權助さん何う仕なさる積りだい。」

「然うさねゑ。」

と權助は一寸思案を仕た風であつたが、忽ち、

「兎に角、此の新聞紙を携へて、濱寺の旦那の處迄行つてから相談を仕やうと思ふよ。」

「然う仕なくちや、仕方はないね。」
「ちや、俺が濱寺へ直ぐ行くとせうかい。」
「それが好いですな。」
「ではこれから直ぐに行くとせう。」
「車でゞすか。」
「馬鹿!!!、車なんか役に立つかい、デ、、電車か汽車でなきゃ。」
「ぢや、然う早く仕度なさいよ。」
「平ぐん!!!。」
「はい〳〵。」
「店を確乎と頼みますぞ。」
「大丈夫　心配は御無用ですよ。」
「何うだかねね、心細い譯だが仕方がないよ。」

と云ひ捨て權助は直ぐ其の仕度に取りかゝつて、それから直ぐと濱寺へ行くべく、奈良屋を飛び出た。

權助は奈良屋の前から電車に乘つて、難波驛から南海線の濱寺行に乘換へて、それから降りると直ぐ車で五百井家の別莊まで、急がせた、

別莊の門前で、轉げんばかりに車を降りて、直ぐと門から呼鈴を押した、すると

「何誰樣で？。」

と戸の内に聲がすると直ぐ戸は開かれた、

「まあ、權助さん。」

と顏を見て下婢のお竹は

「まあお這入りなさい。」

と云へば、